

ふなとや 風

第125号 (2016年10月)

風に吹かれて (103)

白井啓治

・日向こひしく蜥蜴も雀も天を仰ぐ

当地石岡の最大イベントであるお祭りが終わった。今年も恐らく定かではない〇十万人の人が当市を訪れ…と声高らかに広報されるのである。

9月号に、今年も故太田尚一氏が2014年7月号に投稿くださった、「総社宮祭礼と市民の矜持」と題した原稿を紹介しようと思ったのであったが、スペースが割けず断念した。氏の原稿の趣旨は「石岡の祭りに関して、根無し草の濫觴、喧伝文句は撤回し、真に誇り得るものに…」というものである。

今年の石岡のお祭りが始まった時であった。フェイスブックに、『石岡のお祭りの年番制度について、市のHPに元は明治35年とあったものがいつの間にか明治20年になっている。何故か、その理由を市に問うてみたが返事がなかった』と呟きが出ている。

小生の知る限りでは、明治20年に始まった年番制度は、総社宮の奉納相撲に関するもので、現在の石岡のお祭りとは関係ないものである。この事は歴史としての記録が残されている。

その後、明治30年頃から、現在のようなお祭り

が始まり、明治35年に参加町内が増え、新たに祭礼執行の年番制が作られ、同時に現在のお祭りの原型が作られた。その意味で、石岡のお祭りの始まりは、歴史的にはここからなのである。

ところで、この地に越してきて、ここは「歴史の里」であることを知ったのであるが、歴史の里とは言いながら、「歴史」の意味が正しく理解されていないことに大きな驚きをもった。特に歴史は長いほど価値があると考える認識には、ついて行けない。おそらく「歴史とは何ぞや」と問うてみた事がないのではないかと思ってしまう。

おそらく、その感覚が石岡のお祭りは、江戸時代から続く由緒ある…等という言葉が出るのではないだろうか。

ちようどいい機会なので、歴史とは…、について少し考えてみたいと思う。

まず「歴史」という言葉についてみてみよう。言語学的には、その語源は、暦を作成するために時々起こった物事の事象について、その事実を正確に記録する官吏、というところから発生したと言われている。そこから発展し、今日に至っているのであるが、現代における歴史学における、「歴史」の定義は、時間軸において起こった物事について、正確に文書等に記録した物のこと、となっている。

古代史などでは、文書などが存在しないが、石や出土品などが、文書に同等する記録となり、歴史と認識することができる。

歴史学においては、歴史とは「時間軸において、存在する『もの』の変遷を対象化して記述・記録された結果である、と定義付けられている。

このことから歴史の重大性とは、過去へ遡る長さではなく、如何に時間軸の事象の変遷を正確に記録できているかである。

歴史とは事実を意味するものなので、昔から時の権力者たちが、歴史と称して自身の正当性を証明するものとして捏造・改竄して記録を残してきた。古事記なども、天皇の正当性を証明することを目的として、記録された歴史である。古代中国においては、「史」とは皇帝の正当性を主張するために皇帝の変遷を編纂する役人を指していた。

歴史とは、物事の変遷の事実を記した文書である、と理解している人が殆どであろうと思うが、小生もまた、歴史好きではないけれど物事の変遷の事実を言う、とは承知している。

短絡はするが、歴史とは「平たく言えば事実の記録」であり所謂会議の議事録と同じものと言える。

歴史が伝える事実とは、こうしたことを背景として言われる言葉なのである。歴史は時の権力者によってつくられる、というの実は、歴史とは事実のことを言う、と理解されているからである。

我が「歴史の里」も、「歴史とは『事実』を理解して、お国自慢をしたいものである。歴史自慢とはただ古いことを自慢することではないことをよく理解して…。

系外惑星への移住？

菅原茂美

夜空を見上げると、無数の星たちが、地球上の我々人類に微笑みかけたり、逆に、怒りに燃え滾（たぎ）る炎のように輝いて見える。太陽も、その星々の一つであり、惑星という8人の子供を携えている。

今から46億年前に生まれた地球は、太陽からの距離では3番目の惑星であり、岩石に含まれた水分や隕石などから供給された水分が蒸発し、雨となって灼熱の地球を冷やし、海ができる。今から凡そ40億年前、海の底で「生命」が誕生した。

最初、有機物の塊に、何やらそれを包む皮のようなものができ、生命らしきものへと成長していく。そのうちに「塊」は、明確なDNAからなる遺伝子という生命の設計図を備え、**原始生命**が誕生する。そして30億年間、単細胞生物時代を経過し、多細胞時代に突入。最初はオスもメスもない無性生殖。海中の植物が炭素同化作用で吐き出した酸素が空気中に増えると、地上30km付近に酸素原子が3個くっついた**オゾン層**ができ、生物に有害な太陽からの紫外線を吸収してくれるようになる。すると陸上に進出しても、DNAが破壊されなくなり、シルル期（5・1億年前）に単細胞の植物がまず川の浅瀬から陸上に這い上がる。そして追いかけるように動物が上陸作戦を展開。賑やかな地上絵巻を展開する。

海中で脊椎動物として進化した魚類は、今から約4億年前（中生代三疊紀）、海から淡水の川を遡り、浅瀬で鰓（えら）を肺に、鱗（ひれ）を四肢に進化させて、両生類へと発展し、更に3億年前、爬虫類へと進んでいく。爬虫類全盛時代、今から、2億

年前、初めて**温血**を確保し、**原始哺乳類**が誕生する。初めはネズミくらいの大きさで、爬虫類の絶好の餌食であったろう。

しかし今から6500万年前、直径10kmもある巨大隕石が中米ユカタン半島に落下。恐竜は滅びていった。するとその空間を埋めるように哺乳類が繁栄する。そしてその哺乳類の中のモグラなど食虫目の中からサル目（霊長類）が分岐し、肉食でもない、さりとて、草食のみでもない「雑食性」の、我ら霊長類が繁栄していく。

そして今から700万年前、アフリカで霊長類の頂点に立つチンパンジーの仲間から、サヘラントロプス・チャデンシスという、直立二足歩行する1群が分岐し、人類の祖先となる。以後、今日まで化石人類は多数発見されており、凡そ10段階の**パアジョニアップ**を重ね、現代の我々「新人ホモ・サピエンス」に至っている。

チャデンシスからサピエンスまで、必ずしも直系だけとは言えないが、仮に10段階の世代交代があったとすると、1世代あたりの**種の寿命**は平均70万年という事になる。直近の兄貴分・旧人ネアンデルタールは、我らサピエンスに青い目と金髪を相続して、僅か27万年で途絶えたし、親にあたるホモ・エレクトスは175万年も永続した。我々サピエンスも、誕生以来20万年を経過しているが、急に**大脳**を発達させ、**文明**を開化させたはいいが、恐るべき凶暴性の本能が強烈に働き、戦争ばかりしている蛮人の傾向がある。場合によっては自ら己の種の寿命を短縮させる危険性も大いにある。何が文明の進化か知らないが、あれやこれやと環境を破壊し、資源を枯渇させ、人口増加に歯止めがかからず、子孫の住みにくい環境へと、己の首

を絞め続けている。

それゆえ、700万年続いた種の寿命を、愚かにも最後の現代人が、早々に断ち切る可能性は、かなり大きい。あまりにも利己主義に貫かれた、今日の世界の情勢をツラツラ見るに、滅びゆく者の最後の**足掻き**のようにも見える。

さて、ではその我々ホモ・サピエンスは、どのように進化したのか…、どんな旅路を経て今日に至ったのか…と、時に星空など眺めながら、しみじみ思う。宇宙座標に、我々の住む天の川銀河系（星の数約200億個）という円盤が存在し、その直径は、ほぼ10万光年。厚さ1万光年の凸レンズ型をしており、渦巻き状の円盤である。渦巻きは、凡そ2億年かけて1回転する。そしてその一本の渦巻き腕の腕の、銀河中心から2万光年の所に、我々の「太陽」が存在する。

わが太陽は、先代の恒星が老化爆死し、宇宙空間に散った星間物質が再び凝集し、中央に集まって輝き出したのがスタートである。中央に集まった物質は引力を増し、次々物質を引き寄せ、巨大な塊が形成されると、中心で核融合反応が始まり、新たな恒星の始まりとなる。いわゆる「**原始太陽**」の誕生（46億年前）である。物質世界の輪廻転生をしみじみと感じる。そして、先代の燃えカスである星間物質は、まず軽い物質は太陽から遠くの方に木星のような「**ガス惑星**」として誕生する。次いで、重い元素からなる星間物質は、太陽の近くに**岩石惑星**として、特に地球は3番目の距離の所で、しかも、水分が3態（個体の水・液体の水・気体の水蒸気）をなすうる**絶好の距離**の所に誕生した。その星に生命が宿り、遂にこの大宇宙を認識するまでに進化を遂げた我々人類だが、決して崇高なる高

等生物とはとても言えそうにもない。

*

さて、系外惑星とは、太陽以外の恒星に属する惑星の事であり、2016年5月現在、3410個観察されている。宇宙には、銀河は1500億個ある。その一つが、我が天の川銀河であり、凡そ2千億個の恒星の殆どにそれぞれ、いくつかの惑星が付属している。

恒星からの距離・質量・構成する元素の種類・誕生からの年数などが地球と非常に似たような惑星は、この天の川銀河だけでも、100万個はあるはず：と言われる。とするなら、生命が既に誕生しており、場合によっては地球文明より、100万年や1千万年ぐらい先行する文明が栄えている惑星が幾つかあってもおかしくはない。もしかして許されるなら、それらの惑星に、移住も可能？

現在地球上の人口は73億人。毎年8500万人ずつ増えており、早ければ、今世紀の半ば、遅くとも今世紀末には100億人に達する可能性は、非常に高い。地球の人口収容能力は50億人といわれるので、100人収容の施設で、150人が暮らしているようなもの。ギュウギュウ寿司詰め、あつちでもこつちでも、イザコザが発生。最悪の場合、巨大な戦争になり、人類滅亡に繋がる。

*

さて他の惑星に移住など、口で言うのは簡単だが実現となると、そうはいかない。わが太陽系でさえ、すぐ内隣の金星はCO₂が95%で表面温度は470℃。されば外隣の火星の気圧は地球の1%以下の超希薄。平均気温マイナス43℃。昼夜の温度差100℃。酸素濃度は0・13%（地球は21%）。とても人が住める状態ではない。要するに、この太

陽系内では、移住可能な星はない。

さりとて、系外惑星ときたら、たとえ居住環境が地球と全く同じであったにしても、いかにしてそこまで到達するか。この天の川銀河系で、最も太陽に近い恒星は、4.2光年離れたケンタウルス座のプロキシマ・ケンタウリという恒星だが、最近国際研究チームにより、この星の惑星の表面に、水が存在するらしい事が分かった。

さて、移住が可能として、4.2光年をどう乗り切るか？（計算根拠：1秒間に各々、光速30万km、音速0・33km、太陽系脱出速度を17kmとする。）

光速とは、音速の91万倍の速さである。乗り物の速さをマッハ計算ではじくと、マッハ1なら、382万年かかる。英仏開発のコンコルドは、マッハ2だったので、191万年かかる。しかし、これでは地球の引力さえ脱出できない。太陽の引力を脱出するためには、マッハ50なければならぬので、仮にマッハ50の乗り物があつたとしたら、片道、76400年かかる。さあこの道のりを、銀河鉄道で行くか、戦艦大和を改造して行くか。小さなUFOなどでは、到底引越越しできない。

新天地で人類が繁栄していくためには、最低でも男女25人ずつ、計500人乗りの宇宙船が必要。最低これだけの人数がなければ、近親交配となる。

【若い500人の男女は当然、多夫多妻の乱婚制（人類100万年の殆どがそうであった）で、一夫一婦制など地球の**アホな基準**など捨てなければ、子孫繁栄はできない。そして人選は、徹底して健康で、戦争嫌いの温和な性格の人のみを選ばれる。】

宇宙船の大きさは、500人が76400年も凍結睡眠が可能ならそんなに大きく要らないだろう。ただし、新天地に着いたら、凍結睡眠をいかに

して、無理なく「解凍？」するか。

こうして考えてみると、宇宙人がこの地球に攻めてこない理由が良くわかる。大体にして、他の惑星の惑星まで旅をするほどの知的生命が、例え存在したとしても、機械文明がそれほど発達するくらいなら、当然、道徳観念も同時並行して発達しているに違いない。己の欲望を満たすために、なりふり構わず他を侵略する地球文明など、歪に育つたこの地球人のみに通用する概念は、他の惑星の知的生物には、当然排除されているに違いない。あるいは視点を変えて考えてみたら、宇宙に飛び立つくらいに機械文明が発達する頃は、何か、内部矛盾を抱えており、いかに知能優れた宇宙人といえども、種の絶滅に近い段階で、滅亡していったのかも知れない。

*

地球人の過去を振り返ってみると、侵略や戦争のなかった時代など、探すのは容易な事ではない。先住民を殺害し土地や財産を奪い、欲望の限りを振り回して新天地を開いていった世界の歴史。何がフロンティア・スピリットだ。コロンブス以降、ヨーロッパ白人は、南北米大陸の先住民9000万人の、なんとその9割を殺害したという。五角の戦力で戦ったのなら両成敗ともいえるが、馬^(*)も馬車も銃も見た事がないという先住民に対し、圧倒的戦力の差で、しかも毛布に天然痘等、病原体を塗り付け、インディアンにプレゼントするなど、正に悪意の権化だ。

【^(*)馬は北米大陸で進化し北米で絶滅した。但し絶滅寸前にその一部がベーリング海峡を渡り、アジアに進出したその子孫が、現在の馬となる。】更にアフリカから拉致した黒人を、奴隷市場で

競売にかけるなど、歴史を遡って、断罪したい。

現在、世界の大国とか言われる国民は、胸に手を当てて、よく考えてみたらよい。この地球では、機械文明の発展と道徳的行動の発展は、同時進行ではなかった。いわゆる片手落ちの、欲望のみが独走する歪な進化であった。

*

なお、NASAや、世界中の電波観測機関の発表によれば、これまでに、宇宙から人工的な電波の受信は、一度もないとの事。もし、知的生物がどこかにいて、仲間同士とか、飛行物体と基地との間の通信に、電波を使わない手はないだろう。それが何一つそういう人工的な電波通信の気配がないということは、地球人みたいに、電波の垂れ流しを行って、もし地球を攻めて来る敵がいたとしたら、ワザワザ自分の存在場所を敵に知らせるような愚行を避けているか、或は現実に宇宙に向けて電波を発信するような知的生物は、少なくともこの天の川銀河内には、いないのか？

とにかく、どんなにこの宇宙が広かろうと、物理学・化学の法則は厳然として存在する。宇宙船がどんなに進化しようとも、光速で何年もかかる距離を、ある重量の物体を移動することは並大抵の事ではない。それをクリアするまでには、どんなに知能の進んだ生物といえども、大抵は滅亡するに違いない。

生命現象といえども所詮は、物質の物理・化学の連鎖反応に過ぎず、永遠に継続する「大系」はありえない。宇宙人が攻めてくる幻影は、所詮、商業主義のフィクションに過ぎない。そんな事を考えるよりも、現在の地球人の平和をいかにして構築するかエネルギーを注いだ方がましだ。

*

さて世界中に、「UFO」未確認飛行物体」を見たという話は山ほどある。憧れや期待が大きいからであろう。しかしその大部分は、幻覚やフィクションであり、科学的に証明されたものは、一つもない。錯覚で見えたような気がすると言うのであれば、まだ可愛らしいが、意図的に画面を操作し、尤もらしい映像まで作図してマスコミに発表するなど、科学を冒涇するものである。

同じ類の話として、ヒマラヤの「雪男」、ネス湖の「ネッシー」。日本でも既に絶滅した「日本狼」や想像上の動物「ツチノコ」。そして夏になると、毎年、ミイラなどの写真を添えて登場するのが、「カッパ」。あれやこれや、それらしい写真などを載せたりして、世間を騒がす。オマケにどこそこの大学教授が、探検隊を組織して、確認のため、調査に向かった：など、マスコミも、ネタ切れになると、面白おかしく書き立てる。

また、米軍のパイロットなどが『私はある日の夕方、東の空に浮かぶ《虹》を、ジェット機で潜り抜けた』などとホラを吹く。虹は太陽光が雨上がりなどの水滴に反射して観察者との入射→反射角が40〜42度の時にだけ見えるもの（副虹は51〜53度）で、虹に近づけば、角度が変わり、絶対に見えなくなるもの。虹とは固定してどこかに存在するものではない。従って虹を潜った事にはならない。バレるような嘘はつかない方がよい。

*

何しろ、がん病棟に1か月以上も入院していると、暇を持て余し、ロクな事を考えない。お陰であまり退屈せず妄想に明け暮れるのも、乙なもの。例え、がんだろうが悲観などして暇がない。或

は脳への放射線照射で、遂に認知症の始まり？

そこで私の結論。他の惑星への移住など考えずに、地球上で適正な人口を保ち、世界の皆が平等に、仲良く暮らす術を真剣に考える方が、**智慧ある**人のまず為すべき重大事と考えるが、いかが？

|| 徒然なるままに俳句・川柳の真似事 ||

がんなどに 負けてたまるか 月見酒

秋茄子の 美味さにがんなど つい忘れ

栗おこわ 差し入れ嬉しや がん病棟

イチジクの 熟れ待つ敵は ハクビシン

初ひ孫 抱くまで死ぬね がん病棟

ひこ孫の 胎児写メール チンポあり

みな笑顔 退院祝いの 手巻き寿司

名声と冥界

打田昇三

ギリシアの民間伝承に依れば、天地創造の神様が地球上の国々を創り終えて「ああ疲れた」と休息している時に、一国だけ忘れてることに気がついた国があった。それがギリシアだと言う。豊かな河川も緑の大地も肥沃な耕作地も諸国に配分し尽くして在庫が無い。神様は仕方なく少し固いが岩の欠片に残土を混ぜて捏ね始めた。折しも天上には美しい虹が掛かっていた。神様は其れを少し筆取りサービスとして混ぜたらしい。

紺碧のエーゲ海、白砂の海岸、屹立した岩礁、果てしなき青空、無数に点在する島々：ロマンを誘う光景も其処に住む人々にとっては厳しい自然でしか無い。古代ギリシア人は其の狭い土地にし

がみつき、野草などで飢えを防ぎ、紀元前七、八世紀頃から新天地を求めて海に漕ぎ出した。

ギリシア人の植民活動は徐々に広がり、エーゲ海から地中海一帯にかけて百以上の植民都市を造るのだが、トルコの西南部に当るエーゲ海沿岸には、いち早くミトレス、エフェソス、サモスなどの、いわゆるイオニア諸都市が形成されていた。

ギリシアの地図上で一番幅が広い部分のエーゲ海寄り半分は「テッサリア地方」と呼ばれる。首都のアテネから凡そ三百キロ、霊峰オリュンポス山が北を遮る此の平原からは、良い馬と綿花を算出し、鉱物としてアルミニウム鉱石が採れ、日本にも多く輸出されている。然しながら其の辺りはギリシアで最も暑い場所であり「最果ての地」と呼ばれていたのである。当然のことながら人の往来は少なく、野蛮な部族が住むとされていた。其の辺境テッサリアから更に一種の自然境界で隔てられたギリシア北部の平原地帯が「マケドニア」でありバルカン山脈などに遮られていたため周囲の他民族に侵入されることが無かった。

其処に初めて人類が定着したのは紀元前千二百年頃とされ、ドーリア人の一部が入ったと伝えられているが謎が多い。「歴史の父」と呼ばれるヘロドトスの著書を基にした説では、紀元前七百年頃にペロポネーソス半島から北上したドーリア系（スパルタ系）の一部族がマケドニアに入って歴史が始まる…としている。

その謎の多い地域の中心都市が、現在ではアテネに次ぐギリシア第二の都市となったテサロニキである。其処に小さな考古学博物館があり、かつては「見る価値も無い博物館？」として世界的に知られていたのである。ギリシアに対して失礼な

話だが其れが事実であった。

ところが、近代になって其の博物館は突如として「世界有数の貴重な展示品を持つ博物館」に変貌したのである。其の功績者は、ギリシア第一の考古学者マノリス・アンドロニコス博士である。一九七七年（昭和五十二年）愛弟子のドウロウゴ女史以下の調査隊を組みマケドニア地方の遺跡発掘調査を続けていた博士は、テサロニキから西方に六十キロほど離れたハリアクモン川流域のベルギナ古墳（マケドニア式墳墓）から黄金の骨壺を発見した。周辺からは骨壺だけで無く金の縁取りがある有る鎧・兜・銀製の脛当てなどマケドニア戦士を思わせる武器が出土したことから、博士は骨の主をフィリポス二世と断定した。

かつてヘロドトスは「貧困はギリシアの伴侶」と言つたらしいが、ベルギナ古墳からの出土品はヘロドトスを嘲（あざけ）るように豪華華麗なものばかりであった。数年後にはベルギナ古墳の発掘現場に続き、テサロニキ市郊外の工業団地造成地域からも紀元前六世紀以降のマケドニア、トラキア系墳墓群が発見された。

神話が主体のギリシアに初めて人間の歴史を記録したのは、スパルタ系部族アルゲウス家の流れを汲むと称するベルディッカス一世である。此の一族は本当か嘘か知らないがギリシア神話を代表する英雄・ヘラクレスを祖先と称している。ベルディッカスは、英雄の名において先住の諸部族を従えマケドニア王国を築きあげた。

此の王国は七代目ぐらいに地方の大国に発展したが無理が重なって王様が暗殺されてしまった。先王の血筋を称するアミュンタスが王位を継いだのが本当に親戚であったのかは不明らしい。此の人

物は陰険な性格の小心者で野心家だとされ、ライバルを次々消して王位を手にしたのだが、異民族の侵入が激しく、首都にも居られなかった。首都の名称は「アイガイ」と言う。アイガイの場所は長い年月に亘り不明とされてきたが、アンドロニコス博士の発掘調査でベルギナ古墳に近い場所に存在した可能性も出てきたのである。

フィリポス二世はアレキサンダー大王の父親である。息子に比べると余り評判が良くない。幼い頃になぜか母親に暗殺されそうになったらしく性格が歪んだらしい。成人してからは幼時期の反動で冷酷な人物になった。アレキサンダーは母親が教育ママで家庭教師に有名人を付けたりしたから世界の英雄になったけれども、遠征中に死亡したため遺体が何処に埋葬されたのか分からない。

どうでも良いことだが、評判が悪くても立派な墓に埋葬されると、有名だが墓所が不明なのと、どちらが幸せなのか考えさせられる話題である。

地域に眠る埋もれた歴史（19） 木村 進

芭蕉の鹿島紀行と月見の寺

松尾芭蕉が貞享4年（1687）に門人の曾良と宗波を伴い根本寺の仏頂禪師の月見の誘いを受けて鹿島詣に鹿島へやってきました。その様子は「鹿島紀行」に載っています。少し紹介します。

「洛の貞室、須磨の浦の月見にゆきて、「松かげや月は三五夜中納言」と云けん、狂夫のむかしもなつかしきままに、此秋かしまの山の月見んと、

思ひ立つことあり。伴ふ人ふたり、浪客の士ひとり、一人は水雲の僧。門より舟にのりて、行徳と云処に至る。舟をあがれば、馬にもならず、細脛のちからをためさんと、かちよりぞゆく。やはたと云里を過れば、かまかいが原と云ひろき野あり。筑波山むかふに高く、二峰並び立り。まことに愛すべき山のすがたなりけらし。日既に暮かかるほどに、利根川のほとりふさと云処につく。：麓に根本寺のさきの和尚、今は世をのがれて、此処におはしけると云を聞いて、尋ね入て臥ぬ。」

東京深川(隅田川沿い)からは小名木川(水路)を通って荒川へ出て、そこから新川(水路)を通って行徳に出ました。行徳は当時、塩の産地でもありました。江戸からは江戸川を関宿(千葉県、茨城県、埼玉県の境)まで遡れば舟でも利根川に入れますが相当に遠回りになります。このため(葛飾)八幡から鎌ヶ谷、白井を通って木下(きおろし)・布佐までの木下街道を徒歩で行ったようです。(約21~22km) 布佐から利根川を舟で下って鹿島まで行ったことがわかりますが、当時の鹿島詣はこのようなルートが普通だったのでしょう。

さて芭蕉は鹿島へは根本寺の住職をしていた仏頂和尚を訪ねて月見をして歌を読んだのですが、この根本寺は鹿島神宮の近くにありま。そのため、芭蕉が訪れた月見の寺はこの根本寺だと思われている人が多いです。しかし、「麓に根本寺のさきの和尚、今は世をのがれて、此処におはしけると云を聞いて、尋ね入て臥ぬ。すこぶる人をして深省を発せしむと吟じけん、しばらく清浄の心をうるに似たり。暁の空いささかはれ間ありけるを、和尚おこし驚し侍れば、人々起出ぬ。月の光、雨の音、只あはれなるけしきのみむねにみち

て、いふべきことの葉もなし。はるばると月見に來たるかひなきこそ、ほいなきわざなれ。」と書かれています。

この仏頂和尚のことを芭蕉は禪の師と仰いでいたのですが、この時はすでに根本寺から離れた山中の小庵に移っていたとあります。この小庵の場所が銚田市(旧太陽村)阿玉にある大儀寺です。地図を見るとかなり離れています。その当時(貞享4年(1687)8月)も北浦にも舟運が盛んに行なわれており、水戸方面からも銚田經由でこの北浦にも多くの舟が行き来していたものと思えます。舟ならそれほど遠い事もなかったのかもしれませんが。しかし、かなり離れた山里で、月見とは言っても生憎の雨。どんな思いだったのでしょうか。

「月はやし梢は雨を持ながら」

大儀寺へは北浦の湊から山道を上って行く道があり、昔は歩いて寺に行ったようですが、車ではこの道を通ることは少し無理なようです。

北浦に沿って走る18号線から太平洋側の沿上方面に走る道路入口に寺の案内看板があり、そのまま進むと寺の北側の入口と駐車場があります。寺の南側の道路に寺の門柱があります。

その道路は山道ですので車での侵入は無理でしょう。ひっそりとした寺でまわりは竹林です。山門には「宝光山大儀寺」と書かれています。緑が美しい寺です。山門の隣りに「金刀毘羅宮社」があります。北浦の舟の安全を祈願して置かれたのでしょうか。大儀寺の歴史を少し調べてみました。

慶長年間(1596~1615) 華藏曇下(けぞうどん

げ)和尚が草庵を開き、その後、元和2年(1616)阿玉村の領主、荒野右京進が梅易陽禪師を迎えて法光山大儀庵にし、その後六代を経て廢庵となりました。

仏頂禪師はこの近くの札村出身で、延宝8年(1680)に鹿島の根本寺を辞して、貞享元年(1684)に荒廃していたこの大儀庵に入り、復興に努力し、寺名も宝光山大儀寺と改めたといわれています。

仏頂禪師は少し南方の札村で寛永19年(1642年)に生まれました。そして8歳で根本寺の冷山和尚のもとに入り禪の世界に入ります。

その後各地を旅し、33歳で根本寺の住職を引き継ぎます(1674年)。根本寺の冷山和尚はその後、江戸深川に草庵(臨川庵・りんせんあん)を結んでいたようです。鹿島の根本寺の寺領50石を鹿島神宮に取られそうになり、仏頂禪師がこの江戸臨川庵(現臨川寺)に逗留して、寺社奉行に訴えました。(1675年頃?)。

この訴訟争いは7年ほどかかり勝訴がほぼ決まったのは天和2年(1682)だといわれています。そしてこの寺領が根本寺に戻されると仏頂禪師は根本寺の住職を頑極和尚に譲ります。

そしてもう少しの間この深川にいたようですが、根本寺からこの山中の荒れ果てた「大儀庵」を復興して寺として建てなおしたようです。

一方芭蕉は深川の草庵に移ったのは1680年の冬ですから、この深川での二人の交流は約2年程だったようです。芭蕉はこの仏頂禪師に禪を習い、逆に芭蕉は俳句を教えたと言われています。

この大儀寺の山門を入って正面に寺の本堂には「月見寺」と額がかかっています。この寺の本尊は十一面観音だそうです。薬師堂の右に仏頂禪師

の像と芭蕉句碑が置かれています。句碑には芭蕉がこの寺で詠んだ「寺に寝て まこと顔なる月見哉」の句が彫られています。

薬師堂の裏手は竹林やお墓に色々な句碑が立っていますが、その中に仏頂塔が置かれています。

さてこの仏頂禪師については、私も前に栃木県大田原市の雲巖寺を訪れた時に、この地にこの仏頂禪師が結んだ草庵があったことを聞いておりました。そして芭蕉はこの大田原も奥の細道の旅の途中に立ち寄っています。

雲巖寺（雲岩寺）での句（奥の細道）

・ 豎横の五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせば（仏頂和尚）

・ 木啄（きつつき）も庵はやぶらず夏木立（芭蕉）

この雲巖寺の奥に五尺（約1.5m）程の小さな草庵に禪の修行をするために仏頂禪師が暮らしていたことがありました。そして江戸で芭蕉と知り合った時に上の句を詠んだものと思います。芭蕉にはこの草庵での暮らしが強く印象に残り、どんなところか立ち寄ったのでしょうか。

この大儀寺はまわりを竹林で囲まれ、そこにたくさん石の句碑が置かれました。この景色を見て芭蕉の句の意味も、もう少し考えなおしてみたくまりました。

この寺を訪れて、芭蕉が二人の門人（曾良・宗波）を連れて3人でこの山寺を訪れた時のことを想像してみました。少し、芭蕉の書いた鹿島紀行の内容を考えて見ないとなりません。

貞享4年（1687）8月14日に翌日が名月であるので、この名月を禪の師と仰ぐ仏頂禪師の住む鹿島で一緒に眺めようと朝早く深川を舟で旅立ち

ます。小名木川、新川を経て行徳まで1〜2時間くらいでしょうか。そこから木下（きおろし）街道を利根川のほとりの布佐まで歩きます。距離として5里（20km）以上ありますから5〜6時間くらいかかったでしょうか。

途中で鎌ヶ谷から白井へ出て筑波山が紫に輝く風情で謳われていますので天気は良かったのでしょう。布佐は江戸時代初期頃までは水戸街道もここで利根川を渡っていますので船着き場としてもにぎわっていたと思います。しかし、布佐には網代があり、利根川を遡ってくるサケを網で捕まえて江戸に運ぶ漁師がたくさんおりました。

芭蕉たちもこの網代の漁師の家に宿泊しようと思いました。しかし生臭い匂いが漂っていて眠れません。仕方なく夜中に起きて舟で鹿島に向かい出発します。鹿島へは布佐から佐原へ利根川を下り牛堀、潮来に水路でそのまま渡ります。

潮来から鹿島へも舟で行くことはできたいと思いますが、外逆浦を避けて潮来から陸路を少し歩いたかもしれません。

いまま鹿島に渡ったのなら鹿島の大船津に舟で渡ったと思いますでしたが、この大儀寺が北浦の銚田方面に大分行った場所にありますので大船津を通ったとしても更に北の「札」（仏頂禪師の生れた村）辺りまで舟で行ったのではないかと思えます。夜中に出発して鹿島には朝早く着いたのでしょうか、外は生憎の雨がふっていました。

今夜の名月は見られそうもない： そんな思いが3人の頭によぎったことでしょうか。

ここからは鹿島紀行の一部を抜粋してみましよう「昼より雨しきりに降て、月見るべくもあらず。麓に根本寺のさきの和尚、今は世をのがれて、此

処におはしけると云を聞て、尋ね入て臥ぬ。」

：夜中からの船旅で大分つかれていたのでしょうか。寺についた3人は、この雨を怨みながら夜を待つ間仮眠しようです。

「すこぶる人をして深省を發せしむと吟じけん、しばらく清浄の心をうるに似たり。」

：中国の詩人杜甫が「深省を發せしむ」（人に深い悟りの心を抱かしめる）と詠んだ心境とこの山の寺の雰囲気が似ていて、心が洗われるようだといような意味でしょうか

「暁の空いささかはれ間ありけるを、和尚おこし驚し侍れば、人々起出ぬ。」

：暁になり雨も上がり、和尚が皆を起こして、歌詠みを始めます。さて、その時に月は見えたのでしょうか？

「月の光、雨の音、只あはれなるけしきのみむねにみちて、いふべきことの葉もなし。はるばると月見に来たるかひなきこそ、ほいなきわざなれ。かの何がしの女すら、時鳥の歌えよまで帰りわづらひしも、我ためにはよき荷担の人ならんかし。」

・・・解釈は分かれますが、詠んだ歌からは残念ながら名月は見えなかったのではないのでしょうか。でもはるばる月見のためにここまで来たのだから句を詠もうとしますが、皆なかなか詠むことができなかったようです。でもここは禪の心をもつて名月の歌を詠みあつたことがうかがえます。

・ おりおりにかはらぬ空の月かげも

ちぢのながめは雲のまにまに 和尚

・ 月はやし梢は雨を持たながら 桃青

・ 寺にねてまことがほなる月見かな 桃青

・ 雨にねて竹おきかへる月見かな 曾良

・ 月さびし堂の軒端の雨しづく 宗波

(桃青は芭蕉のことです)

和尚の歌と次の芭蕉の歌からは雲が早く流れゆく
の間に月が垣間見えるような歌です。

しかしその他の句はみな月見ではあつてもまだ
雨のしずくが残る禪寺の風情をうたっています。

この大儀寺に来る前にはこの月見で月も垣間見
えたという思いがしていましたが、ここに実際に
やってくると、月は見えなくとも心象として月見
ができたのだという思いがしてきました。



寺の手前に大きな青々として竹林が広がります。
俳句の里となっています。竹林の中にはたくさん
の俳句を彫った石碑が置かれています。これは全
て愛好家たちが自分の俳句を石材店の方にお願
いして彫ってここに置かせてもらったものだそ
うです。

句碑は千基以上あります。

根本寺(鹿嶋) 芭蕉句碑

仏頂禪師がその前にいたという根本寺に行つて
みました。鎌足神社のすぐ近くの歴史のある禪寺
です。臨済宗妙心寺派、瑞龜山根本寺。

「当山は、推古天皇の廿一年(613)聖徳太子が勅を
奉じ、鬼門鎮護と衆民修法に依り、護国興隆の発
願を以つて、本尊に東方薬師如来を安置して建立
された勅願寺である。開祖は高麗の恵灌大僧止で、
初め三輪宗に属し、その後法相、天台と移り法
燈を掲ぐ。

建久二年(1191)鎌倉殿が再興なされ寺領六百
石を寄進下さる 弘安年間蒙古来襲に当り 後宇
多帝は 勅印を下して「天下平均 異国帰伏」の
祈禱を修せしめる 国難霧散するするや本尊の靈
験が頓にうたわれ 遂に東国屈指の霊場となる
勅印今に存す

康永年間 光明帝の勅を奉じ 入宋の教外得蔵
和尚が入山 堂宇を修営し 禅宗に改める 次いで
足利將軍義詮公も仏殿を再興され この時
後光厳帝は「祈禱」の勅額を下賜され現存する

近世 徳川幕府は寺領百石を給し 由緒と法燈
の連綿を願う 末寺二ヶ寺 塔頭五庵あり 例年
五月幕下に謁して歳始を賀す芭蕉翁の鹿島紀行に
依れば 貞享4年(1687) 8月 翁は敬慕する
薫化の師 当山廿一世仏頂和尚に拝顔し山内の小
庵に投宿次の名句を残す

- ・月はやし 梢は雨を 持ちながら
- ・寺にねて まこと顔なる 月見かな

幾多の変遷をへて 幕末文久 元治に至るや
筑波の天狗党の乱の際 当山もその兵火に罹り

莊嚴を極めた伽藍も烏有と帰し 昔日の面影を全
く失う」と書かれています。これによればかなり
古い寺院で、聖徳太子によって建立されたとい
うことです。すごいことだが、今はその面影が
ありません。それでも日本で最も古い寺のひとつ
とされています。芭蕉との親交があり、当時はかなり
の規模の寺院だったと思われます。

芭蕉の鹿島紀行はどのルートを通ったのかは定
かではありませんが、歩いてみるとあちこちに句
碑が建てられています。大儀寺、根本寺以外にも
鹿島神宮、息栖神社、大六天神社(潮来、長勝寺
(潮来)、三熊野神社(潮来・牛堀)、月蔵寺(銚
田) などたくさん場所句碑がありました。

石岡でも国分寺や如来寺などに芭蕉の句碑があ
ります。こんな句碑を探して訪ねてみるのも良い
かもしれません。

日本音楽の話

〓日本音楽の勤労者の理解のために〓

木下明男

今から50年前 私に20代初め、労音と言う音楽運動に身を投
じた頃のお話です。何のために音楽運動を進めるのかの勉強が
始まります！そんな時に学んだテキストから…

2 労働と宗教

ひじょうに古い時代のこととは別として、ざっと
ニッポン音楽の歴史を振り返ると・・・

- 1 奴隸制時代(奈良時代、平安時代)
- 2 封建制時代(鎌倉時代、室町時代、江戸時代)
- 3 資本主義時代(明治以降)

と、大まかに別けて、歴史の順に其々の時代の音楽のだいたいの特長考えてみる。

まず、日本人がまだキワメテ原始的な生活をしてきた、静岡県登呂の遺跡(例えば)に見られるような、原始共産体の時代、それに続く階級社会の始まりの、奴隸制時代の初期の古墳時代、これらの時代の音楽は、どういう特長をもっていたか。

労働が音楽を生んだ

人間が立つて歩くようになり、前足である手が、歩くためにいらなくなった時に、人間の肉体にも大きな変化がおこった。その変化は、二つの点で、人間とほかの動物との間に根本的な違いを生み出した。

- 1 道具を使うようになった。
- 2 言葉を持つようになった。

つまり、人間は労働するようになり、その労働で生産をし、その生産を基礎に、社会生活を営むようになる。人間の手や口や脳髓は大きく変化し、「人間とは生産をする動物だ」とか「労働が人間を人間にした」とかいわれている。しかし、労働といっても、狩やスナドリ(漁業)の時代には、山や川や海の植物や動物を取り、食って生きているだけだから、真の意味の生産とは言えない。何にもない所に、種をまいて、物を作り出す、農業の時代に入って、初めて真の生産が始まったと言える。多くの民族の歴史では、狩り・スナドリ、の時代から、牧畜の時代に移り、それから農業に時代に移っているが、日本人の歴史には、この牧畜の歴史がほとんどなかったのだ、此処から、色々な特色が生まれていると思われる。

労働にはリズムがあり、そのリズムから、音楽や踊りのリズムが生まれまし。このリズムに言葉が加わると、メロディが生まれ、それが歌になる。「ひえつき歌」「ふなうた」「大漁節」「まご歌」「田植え歌」等その他の労働の歌が、今も、そのまま歌われているが、日本の音楽や踊りの原形はこれに近いもの。労働の歌は、生産を喜び社会生活を喜ぶ要素が基礎だから、酒盛りや恋愛がその中で大きな位置をしめるようになる。

労働のないところリズムもメロディもないし、リズムやメロディのない所に歌も踊りもない。歌や踊りが人間にだけあって、ほかの動物にないのは、このためです。そこで、どこの国の場合もそうだが、労働が直接民謡その他の原始的な音楽を生む基礎になり、それらの音楽が偉大な民族音楽に発展して、ついに世界的な大音楽となっている。労働が生産を生み、社会を生み、あらゆる文化を生み出した。勤労人民が歴史の主人公であり、文化の主人公だといわれるのは、このためです。シャーマニズム

もう一つ、古い時代の音楽に大きな影響をあたえているものが宗教です。

この時代には、労度が自然に打ち勝つ力が、まだ、非常に弱かったものだから、自然の災害や病気や死などにたいする人間の恐れは、今の人間にはとても想像もできないほど大きなもの。そこから、超自然のもの(神)にたいする異常な憧れが生まれ、祈りが生まれた。こうして、宗教が生まれ、その宗教の祈りがまた、音楽に大きな影響をあたえた。

アジアの東北地方(東北シベリア、モンゴル、東北中国、朝鮮、日本等) 一帯に、古くから、独

特の原始宗教があり、普通「シャーマニズム」と呼ばれている。(「シャーマン」というのはモンゴル語の「ミコ」(巫女、イチコ、イタコ)のこと)のちの「神道」のことです、はっきり神道といわれるようになったのは、室町時代の末に、京都に吉田兼俱(ヨシダ・カネトモ)が「唯一宗源神道」というのを立ててからです。

シャーマニズムは次のような特色をもっていた。
・自然崇拜の多神教であること。(「八百万の神」というように、自然現象も、植物も、動物も、人間も、みな、神にする。山の神、風の神、水の神、木の神、地の神、蛇の神、狐の神、蚕の神、人間の神など)。

・自然災害や個人の不幸を何かの神の「たたり」(ばち)と考え、加持、祈祷によってこの「たたり」をのがれようとする。現世利益の宗教であること。(思想的な悩みを解決しようとする解脱思想や来世思想)

・やしろ、とりい、しめなわ、へい、まつり、その他、独特の形式をもっていること。

・ミコは霊媒的な特色をもっていること。
階級社会にはいると、自然災害だけでなく、階級的な圧迫の苦しみをさえ、宗教で解決しようとして、支配者も、また、それを利用した。のちに、仏教が入ってくると、仏教も、このシャーマニズムの影響を大きく受けて、本来仏教にはない、災害除けの加持、祈祷を中心にするようになり、また、大日如来だの、八幡大菩薩、神とも仏ともつかない神仏混合のものがたくさんできあがった。

シャーマニズムは、今も、ニッポン国民の生活・習慣に大きな影響を与えています。やしろのない村はなく、祭りのない都会もありません。もっと

も近代的なデパートの屋上や大会社の社内には、必ず、稲荷その他の神社があり、原子炉の建設にも、飛行機の開発にも、きつと、神官が来てお祓いをやります。レーニンも、人間の習慣を変えるのは、思想を変えるよりも難しいといっている。

祭りには、必ず、音楽があり、踊りがあり、演劇があります。生産や社会にたいする喜びや感謝の表現を中心にして、今では、本来の宗教的な意義は殆んど失って続いている。とくに、東北地方に今も残っている、神楽、口説き祭文、その他の音楽や演劇は、古い時代の音楽と宗教との関係をかかなりよく示している。そこでは、今も、巫女（イタコ）や山伏が音楽や演劇をささえる中心になっています。 つづく

県指定文化財（17）

兼平智恵子

恒例の石岡のおまつりが去る九月十七、十八、十九日行われました。二日目、三日目と恵みの雨をうけながらも約四三万一千人（石岡市観光課より）のおまつりファンの皆様と「仮殿」にお出ましになられた祭神様への歓待を賑やかに行う事が出来ました。

昨年から取り入れられました提灯がおまつりのメイン通り（石岡駅前御幸通り）に二m位の間隔で飾られ華やかさとおまつりの風情を醸し出してくれていました。

また、駅前広場の一角に舞台が設けられ、石岡囃子連合保存会の皆様による、石岡囃子との体験交流

等新たな催しが行われ、一層の盛り上がりを感じられました。

来年の年番町は青木町（八幡通り、香丸町と若松町の間に位置する）になります。石岡の皆さんはまた一年間指折り数えて心待ちして過ごして行きます。

県指定文化財の紹介に入ります。

○経筒・石櫃付

有形（考古学資料）

指定 昭和四十二、十一・二四

八郷町の埋蔵文化財（八郷町教育委員会発行）西宮一男編より……嘉良寿里地内で片岡新田集落から柴間集落に通ずる町道が、瓦会街道と交叉する地点の西側畑に、一見して地ぶくれを感じさせる径約十m、高さ約0・五mを測る塚が三基ございました。そのうちの一基から、大永三年（一五二三）銘のある円筒形銅製経筒一個が花崗岩製の外容器に納められたままの状態で見られました。現在、ともに県指定文化財として保存されております。……

以上発見状況でした。以後 西宮一男編より抜粋させて頂きます。

奈良時代から江戸時代まで八郷地区の中心的な道路のひとつであった瓦会街道沿いの嘉良寿里（からすり）地内の経塚遺跡より出土しました。

経塚（経典を永く後世に伝える為、経筒に入れ地中に埋め納めて塚を築いたもの。上に五輪塔などを建てることもある）の内部からは箱状の花崗岩の中央に穴があけられ、蓋を備える外容器（石櫃）が発見され、内部に大永年間（一五二二〜一五二七）銘の経筒（経典を入れ経塚に埋めるために用いる筒）が納められていた。

経塚を築き経典を納めた用器、経筒を塚の中に埋納するという思想は日本においては九世紀以降に盛んに行われ、鎌倉、室町時代には極楽往生、現世利益を祈願する供養として、全国各地で行われるようになり、回国を示す貴重な仏教遺跡である。

本県でもこの時期の経筒としてつくば市北条、石岡市染谷などで発見例が知られており、いずれも地方主要道の周辺部で確認されているそうです。この二例と同じく嘉良寿里経塚も瓦会街道沿いの一角に営まれたもので、室町時代において、その整備の程度や利便の点について確固たる裏付もないのですが瓦会街道も地方の主要道として、その機能を果たしていたものと思われる。

奈良、平安時代には常陸国府造営に伴って、瓦会地内に設けられた瓦塚（当会報一三三で紹介）から製造された瓦などを国府（旧石岡）に搬送した最短路であったといわれており、幕藩時代から、明治、大正、そして昭和二〇年代の後半のころまでは瓦会地方の人々にとって重要な生活道路として広く利用されていたそうです。

現在では経塚の立て札の立っている瓦会街道の前には、ギター文化館が平成四年に建設され、ギター演奏を中心とした、いまでは色々なジャンルの音楽ファンで賑わい、異国情緒が感じられる風光明媚なところです。石岡市医師会病院前の道路、道なりに真っ直ぐに西へ車で走ると五分余りで、経塚遺跡、ギター文化館に到着します。是非お出かけして見てください。尚、経筒・石櫃は石岡市中央公民館内（八郷地区）で見ることが出来ます。

・紅白 桃色ゆれる 秋いろ続く 智恵子

研修って

伊東弓子

九月も過ぎようとしているこの所、ふうつとY子から聞いた奇妙な会議の事を思い出した。研修

の出来事を市民に漏らした事は、議員としての資質が疑われるということで急遽、問責決議案を先に討議することになった議会、それを傍聴したY子の驚きは大層なものだったそうだ。帰ってすぐ「研修」という意味を辞書で引いてみたそうだ。

①学芸をみがきおさめること

②執務能力の向上のために、執務時間をさいて行われる学習

とあったが、自分たちの周りにも生涯学習、文化活動、ボランティア活動、その他の補助金を当てに行われている研修も多い。内容は様々、気にしたら切りがない、と笑って済ませていることが多いが、これでいいのか考え合いたいものだ。一年前、Y子は友だちに誘われてある町の九月議会を傍聴に行った日のことだった。九月議会二日目、十時から一般質問を楽しみに出かけて行ったのだが、受付で貰った用紙の日程第一には、T議員に対する問責決議案があつて、一般質問は日程第二になっていた。これはどういう事かと一瞬驚いている中に、議員数十九人（一名欠席）、傍聴人六人（友はいつもこの位だと言ふ）、執行部全員揃って始まった。

T議員に対する問責決議が始まった。「提案理由は、若手のH議員が読みだした。「質疑」は、みな無言、質問はなかった。議長は、委員会の委託は省略する」という。異議なしの声がかかる。

「討論」は反対討論も賛成討論もなし、そして

「採決」が行われ、賛成多数でT議員は議員としての資質に欠けるの議案は可決した。

T議員から「経緯をお話ししたい」と、要望があつたが、反対多数で却下された。

続いてT議員は議員としての資質に欠けているので不信任案が提出された。「提出理由」を若手のY議員が読み上げた。「質疑」はなかった。議長が委員会への委託は省略する」という。T議員から「経緯を話したい」と要望があつたが、反対多数で取り上げられなかった。

その後、休憩に入った。まだ大した時間も経っていないのにと内心思ったが……。十分後、再開し型通りに進められていった。

「討議」は若手のH議員とY議員が賛成に立ち、中年のH議員は大切な時間をこんな事で使う事に反対と訴えた。

「採決」は勿論賛成多数、不信任案は可決した。その後、又T議員から要望が出た。今度は、速取り上げてくれた。どうしたことかと思つたりもしたが、興味も加わって腰を乗り出して聞いた。

「やつと話しをする機会を頂き有難い、こういう状況に至つたのは、私が懐いていた不安からくるものです。冬、前議長が亡くなつて以来、（sの席を俺らに譲れよ）と浴びせられてきました。（そういう訳にはいかなないよ。任期は確りと勤めていく責任がある）と、答えてきました。度重なつてくると脅される不安が募ってきました。何度繰り返されたか、精神的に弱って行く自分を感じていました。そうこうしている中に今年の初夏の研修旅行での出来事は、私を一層不安に落としきれました。

私は研修そのものを疑問視しています。

故郷の今、今後を一人一人の議員が問題意識と夢をもつて、行く場所や内味を決めていけないのと、地域に持ち帰り、生かしていけないと思うのです。

今回もお座なりの研修でした。夜の懇親会では酒の席とはいえ、不安を大きN氏が拳骨を振り上げて（オーイ、Tくん）と、にこにこしているのも不気味でした。その中、隣りI氏が（隣りの部屋でゆつくり話そう）（いや話しはしない）という私を太腕で肩を抱えて廊下へ連れ出した。廊下から薄暗い空き部屋に入り（二人でさして話そう）というのですがさして話す、あんたはやくさか、ちんぴらか）と問い質し（話は正々堂々とみんなの前で話すことだ）と、腕から逃れ自分の部屋へ行きました。心臓が高鳴って息苦しかったです。

大勢に囲まれてどうなるかという思いでした。研修会後、後援会の仲間との四方山話の中で、不安な気持ちと研修会旅行での出来事を愚痴こぼしたのは事実です。そこには私を心配してくれる仲間がいました。私としてはこ半年以上抱えていた不安の状況を話しただけです。（私は議員としてもっと前向きにいきただけです。私は少し位の手では驚きませんし、耐える事が出来ますが、心の優しい人、弱い人は集団の圧力に耐えられない方もいます。M議長は虐め殺されたと言つても過言ではないと思います。私に（Tさん私はもうだめだ。もう堪えられない）と言つてました。四回目の不信任案が出された時の形相は死が近いと感じました。寒さも加わって、病魔に犯された体は弱つていったのでしようが、議会という中で圧力をかけられたことも事実です。机の上に足をのせていた議員、お喋りの止まらない議員を注意した

ことが、その言葉が気に入らないという理由で恨まれ、四回もの不信任案を出したのです。酷いではありませんか。もっと議会という場を真面目に勤めていきましようよ。今日は新聞社までよんであるそうですね。どういう事でしょうか。私への虐めですか。今日は発言の場を与えて頂けたことは有難く、不安から解消されたと思います。この議会が解散されて、十二月には新しい気持ちでお合いしたいです。議員としての品格を備え、もっと大切なことに力を入れていける人間としてお合いしましょう。私ごときの為に四十分も大切な時間を頂き有難うございました」

とT議員の話はおわかりました。

その日、五十五分遅れて一般質問が始まったとのことでした。T議員は自分の気持ちや姿勢をきちんと新聞記者に話したそうです。翌日の新聞を読んだ人がどう判断するかはいろいろでしょう。細かいことを知らない人、議会の実態をしろとうしない人たち、俺たちが選んでやったんだ、という人、何ごとあったかと心を寄せてくれる人とそれぞれでしょうが、みんなで議会を知る努力をしたいですね。数の多いのをいいことに横暴に振る舞う議員がいないようにいきましよう。私はあの日傍聴して本当によかったと思うよ、とYからの報告がありました。

研修の名目で、公費を使って遊び、楽しんでいる人はどの位の率でいるのだろう。私の身近な人たちは汗水流し、休みも十分とれず働いている。決して裕福ではないが真剣に生きている。その反面、Y子の見た議員の一群と同じように私の町にも喰い物にしている一群がいる。そんな状況の中

に十八歳からの選挙権が認められることになったが、若者よ、どうか真剣に学び、仕事をしていく中で、人を見る目を育ててほしいと願う老人の一人です。

秋の夜長に伸び放題の栗の木から、実が落ちてくる音が聞こえます。虫の音も心地よく眠気を誘います。が、必死で辞書を開いて「公選」「議会」「傍聴」「問責決議案」など調べています。

定期船のない孤島

小林幸枝

沖縄本島から離れた八重山の島のひとつに新城島(あらぐすくじま)があります。この島は、ツアーなどでの上陸は可能ですが、個人での観光旅行は難しい島です。

禁断の土地を紹介する本があり、そこにこの島の事が書かれており、知る事が出来ました。

沖縄本島から南西に430キロほど行くと、八重山諸島があります。主島の石垣島をはじめとし、西表島、竹富島、小浜島、与那国島など19もの有人、無人の島が点在する海域です。

そんな八重山諸島の一つに新城島があります。新城島は上地島と下地島の二島からなっており、二つの島の面積を合わせても3,34平方キロメートルという小さな島です。

現在、下地島は放牧島になっており、集落があるのは上地島だけです。しかし、上地島もひとつとしており住人に逢うことは殆どありません。本に書かれている情報では、2014年現在、島の人口は13人。仕事で下島へ行っていれば、

島に逢うこと等はないと言えます。

往年は島民も700人を超えていたそうですが、今では定期便の船もない、本島の離れ小島です。

美しい海に囲まれたこの小さな島は、他の地の者には決して明かされない多くのタブーや秘密を持つています。

定期船はありませんが、観光船のツアーでの上陸は可能ですが、訪れても島に数多く点在している御嶽(うたき)には足を踏み入れることは出来ません。御嶽は、聖域とされており、無関係の人が立ち入ることが固く禁止されています。

集落のはずれには「人魚神社」と呼ばれるウシヨウ御嶽があり、簡素な鳥居の奥深くにはジュゴンが祀られているという。その昔、御嶽島ではジュゴンの肉を首里王府に献上しており、漁師は漁に出るときには必ずこのイシヨウ御嶽に豊漁祈願をしたと言います。

この神社は立ち入ることは勿論の事、写真撮影も禁止されています。それを犯した人は体調を崩し、禊をするまで何年も回復しないとされています。

新城島の不思議は、豊年祭だという。このお祭りのときは普段人気がない島が、里帰りした人であふれるのだそう。お祭りに参加できるのは島の出身者と一部の関係者のみ。例えば島に着いたとしても追い返されてしまうそう。

秘祭の主役は、方丈の神であるアカマタ、クロマタと新たに生まれた二人の子供。みな山ぶどうの葉で覆い、恐ろしい形相の仮面をつけた姿で現れ、子供でも2メートル、親はそれ以上の大きさで迫力に満ちているという。

子供のアカマタ、クロマタが鞭を振り上げなが

ら走り始めると、人々は恐れて逃げ惑う。この鞭に触れると間もなく死んでしまうという言い伝えがあるという。祭りの最後にはアカマタ、クロマタが豊穰と幸いを人々に授けるといふ。

祭りが終わると島はまた人がいなくなり静まり返り、翌年を待つのだそう。

【風の談話室】

《読者投稿》

私の国府巡り「伯耆&憶良」

京都府精華町 今井 直

『記紀』と言えば、先ずヤマトタケルを思い浮かべるが、垂仁天皇の条にも面白いエピソードがたくさん登場する。不老長寿の妙薬を求めて、「非時香菓（ときじくのかぐのみ）」を探しに田道間守（たじまもり）を常世の国に遣わせた話。また、皇女の倭姫（やまとひめ）にまつわる元伊勢の物語は、天皇の名代として伊勢神宮に奉仕した齋宮の始まりである。さらに、垂仁天皇の勅命により、野見宿禰（のみのすくね）と当麻蹶速（たいまのけはや）が日本初の天覧相撲を闘い、それ以来相撲はわが国の国技となった逸話もある。垂仁天皇の纏向珠城宮（まきむくたまきのみや）があつたとされる地に、国技発祥の地「相撲神社」がある。山の辺の道の途中だ。

昭和三十七年にはここで、日本相撲協会の時津風理事長（元双葉山）を祭主に、大鵬・柏戸の二横綱、琴ヶ浜・北葉山・栃ノ海・佐田ノ山・栃光の五大関をはじめ、幕内全力士が参列して、手数入りが奉納されたという。当麻蹶速に勝った野見宿禰は

その後も垂仁天皇に仕え、埴輪作りの祖であると記されている。それまでは貴人が亡くなると、近習の者たちが殉死のため生き埋めされる習わしだった。野見宿禰は故郷の出雲国の土部（はじべ）に色々な形の埴輪を作らせ、それを生身の人間の替わりに陵に置くことを、天皇に奏上したのである。

垂仁天皇が皇后・狭穗姫（さほひめ）に生命を狙われた事件も描かれている。皇后の実兄・狭穗彦（さほびこ）が謀反を起こし、鋭利な小刀を狭穗姫に渡し天皇を刺殺しよう迫った。結局、天皇暗殺は未遂に終わり、狭穗姫は事の次第を正直に告白した。天皇は軍を発して狭穗彦討伐に出るが、兄の元へ走った姫をそれでも深く愛していた。姫は天皇の子を身籠っていた。戦火の中で産まれた赤子に蒼津別（あむつわけ）と名付け、姫は天皇に息子を託して死ぬ。愛の葛藤ドラマだ。

蒼津別は父である天皇に寵愛されたが、母親を知らず赤子のように泣いてばかりで、成人しても口が利けなかった。垂仁は不憫な息子にたいそう悩んでいた。ある日、父子が水辺で遊んでいた時、蒼津別が鶴（つる）という白い鳥を見て、「アギイ」と初めて声を出した。言葉を話すきっかけになるのではと、天皇はその白い鳥を取りに行くよう命じた。臣下は因幡を越え、出雲で首尾よく捕らえて献上したところ、天皇は大いに喜んで彼に「鳥取造（とりのみやつこ）」の姓（かばね）を授けた。それでこの一族が住む土地を「鳥取」という。（小学生は、なぜか「取鳥県」と書いたりする）

また、垂仁天皇がお隠れになった時、御年百五十三歳だったという!? 記紀には、もっと長生きした人がいる。景行・成務・仲哀・応神・仁徳の五代の天皇に仕え、国政を補佐したとされる伝説的

人物・武内宿禰（たけのうちのすくね）だ。享年二百八十歳とか、二百九十五歳とか諸説がある。「そんなアホな!!」などと、現代風に考えてはいけなないのかも知れない。記紀とはそういう世界なのだろう。

『因幡国風土記』逸文では、三百六十余歳まで生きたとされ、因幡国一の宮の宇倍（うべ）神社は、長寿の神として武内宿禰を祀っている。

古代、鳥取県には東部の因幡国と、中・西部の伯耆国の二国があつた。因幡国庁跡（鳥取市国府町）は、昭和五十三年（1978）に国の史跡に指定され、今は史跡公園になっている。天平宝字二年（758）六月、大伴家持が因幡守としてこの地に赴任してきた。かつての貴公子もすでに四十一歳になっていた。聖武天皇や橘諸兄に相次いで逝かれて後盾をなくし、孤立感を強めていた矢先の遠地・因幡国への左遷であつた。

三年の春正月の一日、因幡の国の庁にて、饗（あ）を国郡の司らに賜ふ宴の歌一首

新年乃始乃波都波流能

家布敷流由伎能 伊夜之家餘其騰

「新しき年の初めの初春の 今日降る雪の いやしけ吉事（よこごと）」

右の一首は、守大伴宿禰家持がよめる。

（万葉 卷二〇四五—六）

新年を寿ぐこの歌が、『万葉集』の最後を飾る。これより後、延暦四年（805）に陸奥国・多賀城にて六十八歳で没するまで、家持の歌は一首も伝わらない。家持は、「歌を忘れたカナリア」になったのか？ 歴史に残る家持の晩年は、やはり「うしろの山に捨て」られた感がする。

家持の歌碑は因幡万葉歴史館の近くの、なんと「庁（ちよう）」という地名に建っている。万葉仮名

で歌が刻まれた三ヶを越える巨大な柱状の自然石だ。傍には、中納言在原行平が詠んだ百人一首の歌碑も建つ。

立ち別れいなばの山の峰におふる

まつとし聞かば今帰りこむ

在原行平は家持からおよそ百年後の因幡守で、実弟の業平と同じく女性にモテモテの貴公子だったらしい。その点で、祖父の平城（へいせい）天皇の血筋をひいていると言えよう。

伯耆国は、西に霊峰・伯耆大山がそびえ、東には国宝投入堂で知られる三徳山（みとくさん）をかえ、古くから山岳仏教の霊場として栄えていた。この辺りには多数の古墳があり、国分寺など古廃寺跡も多い。国の史跡「伯耆国府跡」（倉吉市国府）は、日本海に注ぐ天神川の支流・国府川左岸の丘陵上にある。国府域には、国司が政務を司った国庁跡、それに関連する官衛である法華寺畑遺跡・不入岡（ふにおか）遺跡、国の華とも云われる国分寺跡が近接している。

国庁跡に建つ案内板には、「一九七〇年代に六次にわたって発掘調査が行われた結果、国衙政庁跡と断定された」とあるが、雑草が生い茂ってよく分からない。伯耆国分寺跡と法華寺畑遺跡は、手入れが行き届いた史跡公園で、市民の憩いと学びの広場になっている。「法華寺畑」という地名から国分尼寺跡かとも思われるが、決して寺院の伽藍配置ではなく、国庁に付属する役所であったようだ。仮に尼寺だったとすれば、僧寺とはたった五十坪の距離しかなく、そう言えば、信濃国分寺と国分尼寺はもつと近く背中合わせだった。国分寺建立の詔には、確か「僧寺と尼寺は距離を置いて建てよ」とあったはず。などと、私なんぞ俗

人はついで下世話な妄想にふけてしまう。

不入岡遺跡を訪ねると、造園用なのか庭石らしき巨石の仮置き場になっていた。案内板に、「東西一七九坪×南北一四〇坪の区画内に、大規模な建物群を規則的に配置した八世紀前半の遺跡で、伯耆国庁の前身施設と考えられる」とある。千三百年前には、この場所にあの山上憶良が伯耆守として立っていたのだ。憶良も職務を果たす合間にふと手を休めて、きつと伯耆大山の雪景色を眺めたであろうと、想像したくなる風景である。ただ、庭石は邪魔だ。

憶良は、官吏としても歌人としても遅咲きの人であった。『続日本紀』大宝元年（711）正月の条にある「無位の山於憶良（やまのうえのおくら）を遣唐少録（しょうろく）とした」の記述が初出である。栗田真人（あわたのまひと）を正使とする使節団に、冠位のない憶良が書記官として入唐し、儒教や仏教など最新の学問を研鑽した。この時、四十二歳で、慶雲元年（704）に帰国した。

和銅七年（716）、憶良は「従五位下」に叙せられ、ようやく貴族社会の一員となった。霊龜二年（719）に伯耆守に任じられ、五十七歳にして初めて国司を務めた。およそ五年の在任であったが、憶良の業績は今日何も伝わっていない。また、『万葉集』には短歌六十余首・長歌十一首・旋頭歌一首が残されているが、伯耆に赴任中の歌は一首もない。謎であるが、何しろ千三百年も昔のことので、記述が欠落することもある。

養老五年（721）、六十二歳の時に東宮（後の聖武天皇）の侍講（じこう）の一人に加えられた。侍講とは皇太子の教育係である。さらに、初代の筑前守に任ぜられ九州に下ったのは、神龜三年（725）

）。憶良は六十七歳になっていた。その翌年、大伴旅人が大宰府の帥「長官」として着任してきた。ここから憶良の人生が大きく変わる。旅人は六十三歳、憶良より年下だが直属の上官であり、高い教養をそなえた名家の出であった。その二人がやがて歌を披露する宴を通じて、互いに心から敬愛しあう関係になる。

妹が見し棟（あふち）の花は散りぬべし

わが泣く涙（なみだ）また干（ひ）なくに

（万葉 卷五・七九八）

妻を亡くした旅人になり代わって、憶良が詠んだ哀悼歌である。崩心の悲しみに沈んでいる旅人の気持ちを思いやり、上司を慰められるほどの間柄であった。二人の周囲には、坂上郎女（さかのうえのいらつめ）・小野老（おの・おゆ）・沙弥満誓（さみまんせい）ら優れた歌人が常に集い、互いに影響しあって雅な歌の世界が繰りひろげられた。いわゆる筑紫歌壇だ。旅人も憶良も、その創作活動のほとんどは筑紫時代に集中している。家族を愛し隣人を愛し、この世の現実を歌に詠んだ憶良は、上品でロマンチストの旅人とは歌風が全く違っていた。憶良は特に子供をこよなく愛した歌人だった。

瓜食（はめば）子ども思ほゆ 栗食めば まして偲（しめ）はゆ 何処（いづこ）より 来りしものそ 眼交（まなかひ）にもとなかかりて 安眠（やすい）しなさぬ

（反歌） 銀も 金も玉も 何せむに

まさされる宝子（たからこ）にしかめやも

（万葉 卷五八〇二、八〇三）

学生時代に古文の授業で誰もが習ったはずなのに、近頃の世相に目をやれば、この心を忘れてしまった人がなんと多いことか！左記の歌は、幼い

子供を亡くした父親の慟哭で、読むたびに涙が出る。

若ければ道行き知らじ賄(まひ)はせむ

黄泉(した)の使(つか)負(お)ひて通(と)らせ

(万葉 卷五九〇五)

やがて旅人は大納言に任じられ都に帰った。天平二年(750)の年の暮れで、この時、旅人六十六、憶良七十一歳であった。送別にあたり憶良が詠んだ歌。

天離(あまさか)る鄙(ひな)に五年(いつとせ)

住まひつつ 都の風俗(てふり) 忘れえにけり

(万葉 卷五・八八〇)

二年後、憶良が筑前守の任期を終えて帰京してきた時、旅人はすでにこの世を去っていた。憶良もまた病魔に侵され、ボロボロの身体で長年苦しみ続けていた。万葉学者・伊藤博(はく)は、「憶良の病気は、どうやら慢性の関節リウマチである」と書いている。『万葉集』巻五に、山上憶良の「沈痾(しんあ)自(み)哀(あ)い(あ)い)文」が、八九六番と八九七番の間に挟まれており、題詞にいうとおり、重い病を嘆き自らを哀れむ気持ちを、漢文で綴った長編の三部作だ。『万葉集』でも特異な作品で歌番号が付けられてない。憶良の述懐を要約すると、「今や齢七十四。白髪(しろかみ)が交(ま)じり、筋肉(きんく)も瘦(す)せ力(ちから)も衰(お)えた。手足(てあし)は動(う)かず、関節(かんせつ)は悉(ことごと)く痛み、身体(からだ)がだるくてまるで重(おも)りを背負(か)っている感じだ。杖(つゑ)を頼(たよ)りに歩(あ)こうとするが、足(あし)をひきずる」と、重症だ。

伯耆国(伯耆)では冬の寒さが厳しく、その頃から症状がおこり、筑前(筑前)での五年間(ごねん)がリウマチをさらに悪化(あくわ)させたようだ。老い(おい)の苦惱(くなん)や病苦(びんく)の中(なか)、山上(やまの上)憶良(いりょう)は死ぬ(しぬ)直前(ちか)の六年間(ごねん)で集中的(しゆんじつてき)に、八十首(やそひ)ばかりの傑作(たっさく)を後世(ごせい)に残(のこ)したのである。伯耆(伯耆)国(こ)での歌(うた)が

一首もなくとも、農民(ひつじ)の暮(くらし)しをそのまま描(え)いた「貧窮(ひんきゆう)問(と)答(こた)歌(うた)」などは、伯耆(伯耆)や筑前(筑前)で憶良(いりょう)が庶民(しやくみん)の姿(すがた)を自身(みづか)の目(め)でとらえたのは確か(しやうま)である。

憶良(いりょう)が国司(くにのみ)として伯耆(伯耆)に赴任(しゆにん)したのは、西暦(せいれき)七一六年(七一六年)。今秋(こんあき)、鳥取(とり)県(けん)倉吉(くらよ)市(し)ではこれに因(よ)り、「山上(やまの上)憶良(いりょう)伯耆(伯耆)守(しゆ)赴任(しゆにん)三(さん)百(ひゃく)年(ねん)記念(きねん)事業(じぎやう)」を行(お)っている。博物館(はくぶくわん)で「憶良(いりょう)が見た(みた)伯耆(伯耆)国(こ)展(てん)」「講演会(こうげんかい)・憶良(いりょう)」「や演劇(えんげき)公演(こうげん)「憶良(いりょう)の翼(よく)」」「記念(きねん)短歌(たんか)募集(むしゆ)集(しゆ)」である。

私は講演会(こうげんかい)の機(き)を逃(に)がしてしま(しま)ったが、車(くるま)で五時(ごじ)間程(まじら)かけ博物館(はくぶくわん)へ出(で)かけてきた。憶良(いりょう)が何(なに)を見たのか(の)か、新資料(しんしりょう)でも見(み)つかなか(な)ったのか(の)かとワクワクした。ところが展示品(てんしひん)は、国分寺(くにのけ)跡(あと)出土(しゅと)品(ひん)など憶良(いりょう)よりずっと後の時代(じだい)の、明らかに憶良(いりょう)が「見た(みた)」はずがないものばかりで、がっかりだった。憶良(いりょう)が実際に(じつじやん)見た(みた)可能性(かんのうせい)がある(あ)るのは、不入(ふにゅう)岡(おか)遺跡(いせき)から出土(しゅと)した欠けた土器(どき)の皿(ひら)二(に)点(てん)だけであ(あ)った。夏野菜(なつやさい)の「オクラ」でも添(そ)えてあ(あ)れば、洒落(しやれ)にもな(な)ろうに!? 山上(やまの上)憶良(いりょう)について再勉強(さいべんきゆう)でき(き)ただ(ただ)けで良(よ)しとしよう。

参考文献(べんかんぶんぎょう)・伊藤(いとう)博(はく)著(しやく)『万葉集(まんやふし)釋(しやく)注(ちゆ)』(集英社(しゆえいしゃ)文庫(ぶんこ))

終活(しゆくわつ)(1)

木下(きのした)いくこ

両親(りやうしん)が亡(な)くな(な)って数年(すねん)(父(ちち)5年前(5ねんまへ)98歳(98さい)、母(はは)1昨年(1しよねん)母(はは)94歳(94さい)で他界(たがい)この数年(すねん)整理(せいり)に追(お)わ(わ)れてい(い)る。今年(ことし)こそは、すつきりさせようと思(おも)って中々(なかなか)思(おも)いきれない、昨日(けふ)も半日(はんじつ)整理(せいり)したが、捨(す)てた物(もの)はごみ袋(ごみぶくろ)一つ(ひとつ)だ(だ)った。

昨夜(けふや)大決心(だいけつしん)：思(おも)いき(き)って捨(す)てる事(こと)を…だ(だ)って、なが(なが)い、なが(なが)い、自分(じぶん)史(し)の整理(せいり)「終活(しゆくわつ)」が控(ひか)ま

えているし、これがまたしぶとい。自分の生き様(いきさま)頑張(ごんぢやう)るぞ!

父(ちち)の書類(しりょう)の整理(せいり)

父(ちち)は子供(こども)の頃(ころ)、腎臓(じんざう)を患(か)い学校(がっこう)へも親(おや)に背負(か)わ(わ)れて行(い)ったと(と)か。それ(それ)なのに、何枚(なんまい)もの賞状(しょうじやう)が…。

健康(けんこう)保(ほ)険(けん)を1年(いちねん)間(ま)1回(いちかい)も使(つか)わ(わ)ない感謝(かんしゃ)状(じやう)。賞状(しょうじやう)と一緒(いっしょ)にご褒美(ごほうび)が。その年(そのねん)によ(よ)って毛布(けふ)だ(だ)ったり、シーツ(しーつ)だ(だ)ったり、旅行(りょこう)な(な)どもあ(あ)ったよう(よう)です。今(いま)もそ(そ)うい(い)う制度(せいど)あ(あ)る(る)のでし(し)ょうか? そんな(そんな)、命(いのち)の保(ほ)障(じやう)がな(な)かつ(かつ)た父(ちち)が、戦(いくさ)争(そう)に7年(しちねん)も行(い)って、98歳(きゅうじゅうはちさい)迄(いた)り生(な)けるとはね(ね)え。

父(ちち)への詫(わ)び

父(ちち)は晩年(ばんねん)よく沖繩(おきなわ)の話(はなし)を(を)して(して)いた。父(ちち)のメモ(めも)を(を)見(み)ると(と)しば(しば)らく宮古島(みやこじま)に(に)いた(いた)ら(ら)しい? その後(のち)沖繩(おきなわ)本島(ほんじま)に抑留(おさうりゅう)その当(た)時の戦友(せんゆう)は大(お)分(わ)いなく(なく)な(な)った。そして、沖繩(おきなわ)に行(い)って(って)みたい(たい)と何(なん)度も何(なん)度も言(い)っ(つ)てま(ま)した。

私(わたし)たち夫婦(夫婦)そんな父(ちち)の気持(きもち)を考(かんが)える余(あ)裕(ゆう)も(も)なく、ギタ(ギタ)ー文化館(ぶんかかんと)の仕(し)事(ごと)に没頭(もくとう)して(して)いた。亡(な)くな(な)った後(のち)、父(ちち)の大好(だいこう)だ(だ)った職員(しやくいん)さん(さん)(談話館(だんわかんと)が話(はな)してくれま(ま)した、昔(むかし)を思(おも)い出(で)すよう(よう)に、こんな歌(うた)を歌(うた)った…と、

「伊良部(いりべ)ふもとの、みずたの、稲(いね)は、

年(とし)にお米(こめ)が(こ)度(ど)と(と)れる。サア、よいよい。」

私(わたし)たち家族(かぞ)は一回(いちかい)も聞(き)いた事(こと)ありま(ま)せんで(で)した、「ごめん(ごめん)なさい。お父(おや)さん。」

整理(せいり)が進(すす)んでい(い)くと父(ちち)には弟(あに)が、赤茶(あかぢ)けた紙(し)紙(し)死(し)亡(わ)告知(こ)書(しょ)が(が)出(で)て(て)きた。陸軍(りくぐん)上等兵(じやうとうへい)、昭和(しやわ)20年(ねん)8月(がつ)19日(にち)、満洲(まんしゅう)虎林(こりん)・・・陣地(じんち)に(に)於(お)いて戦死(せんし)の通知(つうし)

通知日は昭和27年11月2日。享年21歳。

自宅での葬儀日、昭和27年12月5日。私の記憶：大勢の人の中で訳も分からず、はしゃいでいた。7年もの間、親はどんな気持ちで待っていたのだろうか？ 21歳の若さで何を思っただけで死んでいったのだろうか？ 出会った事のないおじさんに思いをさせた。今年のお彼岸は新たな気持ちのお参りになる。

養生日記

堀江実穂

いよいよお退院

今日は、血液検査と尿の検査が行われた。突然の検査だったので「何か？？」と心配した。

そうしたら看護師さんに

「もう直ぐ退院ですね」と言われた。

ビックリして聞き返した。

「私、退院できるんですか？」

すると看護師さんは

「よく頑張りましたね。おめでとう」

と言ってくれた。

私は余りの嬉しさに「やったあ〜ッ！」と大声を出し、はしゃいでしまった。

夕方医師が来て

「検査は以上ありませんでした」

と笑顔で話してくれた。

入院中は苦しい事、辛い事、色々あった。

しかし、退院を間近にすると入院生活も三食昼寝付きで、悪いことばかりではなかったな、と懐かしく思うことができた。

そんな自分をみて、もう大丈夫だと自信が湧いてきた。

てきた。

退院したらまた一人暮らしが始まる。でも今度は確り自分を見て暮らせるだろうと思う。

《風の呟き》

社会進歩の尺度はモラル

菅原茂美

その社会が本当に成熟しているかどうかは、経済などではなく、隅々までモラルが行き届いているかどうかだと思う。どこの国の首領も「国益」第一。尤もそうでなければ、選挙に勝てないのであるが、他国はともあれ、まず自国を豊かにする事に専念する。自国が豊かになるといふ事は、貿易相手国は、煮え湯を飲まされる事、多々あり。そのような不均衡は、世界の至る所に見え隠れ。

近年中国人などによる「爆買い」客を、政府資格の「通訳案内士」をつけずに無資格ガイドにより免税店に客を案内し、巨額のバックマージンを稼ぎまくる旅行会社が多いという。格安ツアーを組んで、観光地案内は、ほんのわずか。もっぱら免税店の客引き。バックマージン代は当然商品に上乗せ。結局、超高価の爆買いをさせ、それが中国で知れ渡り、客は激減。日本の信用は丸つぶれ。

今、日本への外国人観光客は年間2400万人。政府は2020年には4000万人の外国人を呼び、観光立国を目指す。先回りをしてぼったくりの「悪」を働く輩がいる。正にモラルハザード。日本も廃れたもんだ。

さて日本は、これまで道徳的には世界の模範とされた。確かに日本は、長い間の鎖国政策や島国であったことから、『人種のるつぼ』といわれる現

象や、移民・難民など、さほど多くはなかった。識字率も高く、「家」を守るといふ観念が強く、躰や家庭教育もかなり徹底していた。公德心も高く、巨大な地震津波の後、商品略奪などもなく、世界から、かなり尊敬の目で見られた。

なのに、老人の世迷言と言われるかもしれないが、青少年の無礼・無作法などに余る。最近目にした事だが、杖を持った老人が細い歩道を歩いていたら、スマホに夢中の青年が正面からやってきて、老人を路の脇にどかせ、そのまま、真ん中を通過して行ってしまった。それに世も廃れたものだと思うのは、富山市議定員40名のうち、議長はじめ9人が辞表提出。理由は政務活動費の不正受給。これは氷山の一角。県議・国会議員すべてに通じる日本の悪弊。「政治資金規正法」という大策法のもとに、先生と呼ばれるアウトロウがいかに多くはびこっているかという事だ。実は金や権力に固執する先生を選んだ国民が悪いのだが。

更に卑近な例だが、私の近くの公園を取り上げると、春、桜が咲けば枝を折る。「日時計」は壊す。水飲み蛇口は壊す。東屋のテーブルはナイフで削ったり、ごみなどを燃やして焦がしたり、みんなが食事などするテーブルなのに、数人土足で上がり、押し競饅頭をし、泥だらけにする。そして、ペットボトルやごみなど、毎日平気で捨て去る。

最初は私も早朝ゴミ拾いなどしたが、あまりにも改まらないので途中で止めた。市委託の業者がやるようになった。若者が公共の施設を壊したり落書きしたりするのは、その親がしっかり子供の教育をしてないからだ。親はどんなに忙しくとも、我が子に「世間に迷惑をかけない」教育をするのは、最小限度の義務だ。従って国なり自治体は、

まず「親の再教育」を真剣に考えるべきだ。

風と戯れて

木下明男

・初秋

ころちゃんにせがまれての、早朝散歩に秋を感じさせる



・台風季節

長年の習慣、中々心の隙間は埋まらない！



・稲実る

散歩していると色づき穂が垂れている田圃をみて…！



・足尾山の落日

涼しい風が吹くと足尾のやまに夕陽が落ちていく！



・秋色

朝早く吹く風に秋を感じさせる！



嬉しき兄よりの便り

白井啓治

この10月号の編集の目鼻がついた時であった。鈴木健兄より便りが届いた。9月号の「風に吹かれて」を読んで、久しぶりに筆を執ったとのことであった。会報への投稿ではないとのことでしたが、「落ち穂広」と題した文を拝読し、是非ここに掲載させていただきたいと電話したところ、快諾いただけたので紹介させていただきます。

鈴木兄の石岡の地名に関する考察は、何度か拝読しており、この会報でもどこかで紹介したいと思っていたが、なかなか実現できないでいた。

今回、兄のお手紙により、勞せずその機会をつくる事が出来たことは大変うれしく思っている。

暫し腰掛のつもりでやって来たこの石岡で、この地に伝えられ、既に死に絶えた物語に新しい命を吹き込んでみようと思い立たせてくれたのが、鈴木兄の出版された「常陸国風土記と古代地名」の本に出合ったことであった。

物語の再生も、暫しの腰掛の余興のつもりで書いたのであったが、それがことば座への「常世の国の恋物語百」の脚本に挑戦する切っ掛けになったのだから、私にとって鈴木健兄は直接の交流は数えるほどもないが、心開けるふるさとの兄であると思っている。

むのたけじ氏を追悼する意味もあって、戯れ書きした稚拙な文に早速に対応を頂いたのも、鈴木兄ならではの感謝である。

「落ち穂拾い」

鈴木 健

過日たまたま「ふるさと『風』」9月号の白井会長さんの巻頭言「風に吹かれて」を拝読いたし共鳴いたしました。「閉塞する社会は、何かの発言をみとめると先ず拒否することから始まり、次に否定しようとする。そして、その発言をなかつたものとして、ごみ箱に捨てて見なかつたことに、知らなかつたことにしようとする」。私たちは今まさに、そのような環境の中に閉じ込められているように思われます。ひととき、「ねじれ国会」という言葉がはりました。ねじれが、ある意味正常なのに「ねじれはダメ」となり、「ごみ箱に捨て」られ政権与党が大勝しました。会長さんは最近亡くなられたむのたけじ氏の「たいまつ」のように「自分の発言を発信し続ける紙でありたい」と語ります。それに賛同し、引退したのに身勝手にも、石岡・高浜の地名を取り上げさせていただきまし

た。

一 石岡という地名

常磐線の下り列車は、恋瀬川鉄橋を過ぎると、まもなく高浜駅に着く。ここからつぎの石岡駅までは、わずか3分ぐら이다。この石岡とか高浜という地名の由来について『石岡市史上巻』の編纂専門委員長はその序説で次のように書いている。

「石岡の話は鎌倉時代の文書に見える。当時茨城の台地、とくにいまの外城あたりを茨城岡(うばらきのおか)と呼んでいた。これが訛って岩岡・石岡となったのである。現在茨木に茨城内(いわきちいばらきうちのみり)がある。この訛りと同一である。」「高浜は茨城から東方に延びた大きな丘陵の突端に位置する。」「高い浜辺」の意味である」

ここにいう茨城は、茨城県や(西)茨城郡、あるいは茨城町の茨城ではない。石岡市大字茨木(はらき)も同じだ。「当時」より以前の奈良時代から「茨城」という地名があり、最近では「ばらき台」という団地もできているが、「茨城岡(うばらきのおか)と呼んでいた」とする記録はなく、したがってそれを根拠とした語源は妄説である。また「いわぎじ」というのは、岩城内と書かれているのであって、「茨城内」と書かれたとする人にもお目にかかったことはない。それらは「石岡」の語源を導くためにした編纂専門委員長の自作自演の産物かと勘繰りたくなる。自説を成立させるために、史実をねじまげる。それは、真実の追及とは縁もゆかりもない人たちの所為である。さらに解せないのは、そのような根拠のない語源説に反論はもちろん疑義を呈する人も見当たらないことだ。

では、石岡・高浜の語源はなにか。国語の解釈

では、石岡は石の岡、高浜は高い浜ということであろうが、その地の歴史も地名に大きくかわつてくることも考慮にいれなければならない。この地には奈良時代に国府がおかれた。それは人々の想像を絶する怪物の出現であったろう。「その尊むところは、ひとえにその辞(ことば)にありて、異朝(中国を指していた)のごとくその尊むところ文字にあらざ」(新井白石『国郡名考』)。当時多くの人々は漢字がわからなかつたので、国府という文字ではなく、コクフという言葉でそれを理解したことであろう。北条(ホクジヨウ)がホウジヨウと呼び習わされたことに等しくコクフはコフやコウとも呼ばれ、それらに対する当て字が今の地名にまで引き継がれているところが多い。(鳥根県若見国府(コクフ・浜田市府(コウ)町、大阪府藤井寺市国府(コフ)、鳥取県倉吉市国府(コウ)、富山県高岡市古国府(フルコクフ)・古府(コフ)、石川県金沢市古国府(フルコ・古府(コフ)町、七尾市古府(フルコ)・国下(コクガ)、栃木県栃木市古国府(フルコウ)、山梨県笛吹市御坂町国府(コクガ)・春日居町国府(コウ)、愛知県豊川市国府(コウ)、岡山県岡山市国府市場(コクフノイチヂ)、徳島県徳島市府中(コウ)、大分県大分市古国府(フルゴウ)、千葉県館山市香(コウ)はどうか)さらに、富山県高岡市の高岡・当地の高浜も、「尊むところは文字」にあるとするならば、高き岡「高き浜」で終わってしまう。しかし、「上岡(カミオカ)の里・神阜(カミオカ)と号(ナツ)く」、「御立阜(ミタチノオカ)・御立岡(ミタチノオカ)といふ」(『播磨国風土記』)などと書かれていることから阜(オカ・ラ)↓岡(オカ)で、コクフ(国府(コクフ) || 石阜(コクフ)・石阜↓石岡が成り立つ。同様に、コウ(国府(コウ) || 高(コウ)・国府(コウ) 浜↓高(コウ) 浜↓高浜(タカハマ)とはならないか(後述)。

二 反論

右のような話をする、「では、北茨城市の石岡にも国府があったのか」とか「神栖市の高浜も国府の浜か」という得意気な反論が返ってきた。地名というのは中央省庁で同一語源から一律に決めるものでも思っているらしいが、そのグループの住民が必要に応じて個別に決めるものであるから、同じ地名でも語源が異なって当然であろうし、同じ語源の同じ地名が軒並み続くことがあっても、不思議ではない（具体例割愛）。

三 アイヌ語地名

ところで過日、友人から石岡という地名にアイヌ語説があるという電話があり、早速市立図書館で調べた。

それはキャリアのある方がただひとりで執筆編集し、石岡市教育委員会が発行した『石岡の地名』（平成八年）の巻頭の「総説 市名『石岡』の由来について」に載っていた。編集執筆者は、そこで、「従来の所説」として紹介した九氏のなかのつぎの「深谷重雄説」だけを重視していた。

「一古老が言うには「いしおか」とは「うしおか」というアイヌ語より出たもので安住の意味を表すと言う。」「石岡図書館のアイヌ語辞典を見たところ、石は明らかに「ウシユ」で、岡は「オガ」とあった。石岡は「ウシユオガ」と発音されているようである。

意味は、石は森の多いことのようにであり、岡は広い土地という意味を持つようである。してみると石岡は「ウシユオガ」で意味は広い森であって、森林あれば狩物あり、狩物あれば生活に豊かさを意味する。したがって安住即ち住むに安らかを意味

することになるかと解される。

これを受けて執筆者は、「諸説のうちで「アイヌ語起源説」は最も魅力的である」「もつとも説得力をもつと考える」としている。

この『石岡の地名』は、教育委員会によって前記の『石岡市史』のなかからさらに重要なテーマを選定し、より詳しい調査・研究を行って刊行された」（『発刊に当たって』教育長）もので、地名に関する市の公式見解となるものであろう。

編集執筆者は自分でそのアイヌ語辞典にあたるのであろうか。そのうえで、石岡の「石は森の多いことのようにであり、岡は広い土地をもつという意味のようである」と納得したのであろうか。

そのようなアイヌ語の存在に私は頸をかしげ、とまどうばかり。たしかめもしないで「魅力的である」と丸受けし、「説得力がある」と丸投げしたとすれば責任重大。それが市の公式見解となってしまうのだから。

さらにけちをつければ、アイヌ語辞典に「岡は「オガ」とあった」とするが、アイヌ語には濁音はないので、それは茨城方言辞典ではないだろうか。

四 高浜のことなど

当初に例示したように、各地のコクフ・コフ・コウには意味のある当て字が使われたが、千葉県市川市国府台（コウノダイ）は「関東古戦録に、この地は日本武尊の鵜（コウノトリ）を見たまえる縁由にてその名起こるといえるは採り難し。中古以来、通じて、鴻の台（コウノダイ）、高野岱（コウノダイ）などにも作れり…中略…ふるき文には国府台（コウノダイ）・小府代（コウノダイ）・鴻岱（コウノダイ）とも書

きたり、今、ところの者にとえば、高野台と書くという。』（『大日本地名辞書 坂東一九二二年』安房国府のあった同県館山市香もそのコウか）。

石岡では、「国府大掾（コウノダイジョウ）」（『常府総覽記』一七八四年）・「国府勢堂（コウセイドウ）」（『府中雜記』一七九〇年代）に対して「香野大掾（コウノダイジョウ）」（『常陸府中旧跡弁蓋記』）・「高野大掾」（『三村明細風土記』一八六九年）・「高大掾（コウノダイジョウ）」・「高野勢堂（コウノセイドウ）」（『南城高家録』）などがあてられ、国府（コウノ）＝高野（コウノ）＝高（コウノ）であった。「国府（コウノ）の宮」（『常府総覽記』）には「鴻ノ社（南城高家録）」などの表記も見られる。この間の推移を『府中雜記』は、「常陸大掾国香（ヒタチダイジョウクニカ）後世（ノチノヨ、今ニ至テハ香ノ大掾又は鴻ノ大掾ト書スルアリ、全非ナリ、国府大掾（コウノダイジョウ）也、国民挙ゲテコフト云シ故、後誤テ鴻又香也ノ字ヲ書シタ也」と記している。

ところで国府は一国の政治や経済の中心なのでみなと（津）をもっていることが多く、それが地名として残っているところも少なくはない。たとえば、小田原市の国府津（コウツ）は相模国の国府の津、宮城県塩釜市香津も陸奥国の国府津の遺称、大阪府泉大津市の高津も、もとはコウツと読み、国府津の転字といわれ、和泉国国府の津があったところだ。同様に、『常陸国風土記』に格調高く讃えられている高浜は、常陸国府の津のあったところで、高浜という地名にもその歴史が刻み込まれていて不思議はない。ただし古い発音は上記の国府台（コウノダイ）の以下のようにすべてといつてよいくらい「ノ」が入った。またその「ノ」は「野」とも書かれた。

高浜も当初は国府浜（コウノハマ）から高浜（タカハ

マに変わったのではなからうか。というのも、高浜の山王川の対岸に高野浜城の遺跡がある。これは今もってコウノハマジョウと呼ばれている。ノに野をあてているが、コウノハマだ。地形を見ると高浜は北に高台がつらなる。北風は防げるが、東・西の風はその高台のヘリの沿って吹き抜け、南風はまともに吹きつける。荷降ろしや停泊などは困難で、おまけに国府には高台を登り遠く荷を運ばなくてはならない。国府の浜としては最悪である。

一方、そこへは国府方面から山王川という小流が合流している。合流から約1キロ上流に周りを高台に囲まれた袋状の古代にとつては理想的な船溜り地形がある。そこがかつての高浜(コウノハマ)だったのではないか。

右記の高野浜城(コウノハマジョウ)はそれを見下ろす位置にあり、国府浜(コウノハマ)、高浜城(コウノハマジョウ)であつたらう。その縁辺には関戸という小字が残っている。それは税関ではなかったか。ここで検査・徴税後小舟に積み替え、国府の側にある舟着き場(今の石岡駅あたり)まで山王川を遡つたと思われる。

『新編常陸国誌』(中山信名1836年没)には、『国府田(コウダ) (国府浜附)』新治郡国府田ヨリ出ツ(今の真壁郡)、水谷氏ノ臣ニ国府田孫兵衛アリ、また国府浜市衛門と云ヘルガアリ、コレハ他ノ地ヨリ起ルカ、又此ノ地ヨリ出ルカ、詳ナラズ」とある。彼は「他ノ地」現石岡市高浜「ヨリ起」つたに違いない。高浜は国府浜だった、と述べている。

五 石岡・石下

筑波山を挟んで、東に石岡、西に石下(現常総市)がある。その石下は平将門が独立王国を樹立した時、国衙を置いたとされた。彼は939年に石岡↑石阜↑コクフを攻撃し、壊滅させている。山梨県笛吹市の春日居町国府、同市御坂町の国衙。能登国府のあつた七尾市に国分寺とともに国下町(コクガマチ)。国衙は読みがむずかしいので国下(コクゲ)↓国下(コクガ)↓国下(コクゲ)↓石下(コクゲ)↓イシゲとなつたのであろう。ほかにイシゲの語源が考えられるだろうか。私は石岡と石下は双子地名であつたと見たい。

石岡市の当局あるいは知識人たちの、石岡・高浜の語源理解は前記のとおり。それに対して、問題は善良な市民の立ち位置。疑問や発言は「拒否」し「こみ箱に捨てて、見なかったことに、知らなかったことにする」。見ザル・聞かザル・言わザルの三猿主義。権力には盲従、権威は妄信。「この道はいつか来た道」とうすうす感じながらも、みんなといっしょだからと安心してあてもなくさまよううちに、引き返せなくなる。いや、「いつか来た道」と感じるのは戦争の時代に生きた世代だけ。多くの方々は何んのことか理解できないでしょう。とにかく、闇夜のなかで行く手を照らす「たいまつ」の、炎をつのらせる「風」を大切にしてください。さるようお願いいたします。

【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

巻第五(二一・一)

デパートで言えば開店セールに相当する大切な最初の合戦に於いて、スポーツだと審判が呆れて帰ってしまうような素晴らしい負け方ではあつたが既に関東では源頼朝が「平家追討」の兵を挙げているのであるから、平家物語も緊急に防戦態勢を整えなくてはいけないのだが、著者の一人が僧侶と推定されていることもあつて、無理に仏教に結び付けようとする癖がまたも作品に出ている。

題名を文字通り読むと今回、書く内容が宗教的かつ文学的なものと錯覚するが原本に「文学」と書いてあるのは「文覚上人(本文で説明)」のことであり、また「勸進帳」が有るので歌舞伎が好きな方は弁慶も出て来るかと期待されるかも知れないが是は時代が少し早い。文覚上人が高尾山神護寺(奈良時代創建の真言宗別格本山)再興を目的とした勸進(寄付受)活動をする話である。

文覚は渡邊党の武士出身なので僧となつても現役時代の癖が出る。後白河法皇の許に寄付を貰に行つたのだが余りにも態度が悪かつたため寄付金を貰えないどころか罰として伊豆に流罪の実刑判決を受けた。伊豆は源頼朝の流刑地であるから其処で文覚と知り合った頼朝が平家打倒を決意した…という俗説も成り立つ。平家物語は其れに依つて流れるが、流れる者の坊さんに唆(そそのか)されなくても成人した源氏の御曹司の周りには平家全盛で陽の当らない東国武士が幾らでも居た。

それら東国武士団も、かつては源氏に従っていた

のであるから、天下を抑えていた筈の平家が京都を捨てたり、規模はどうでも反平家運動が地元で起きたりすれば、誰でも「何か？」が期待出来そうな夢を見て平家離れをするようになる。

そうした中で今回の最初の章段は「咸陽宮」と言う古代中国の話になる。緊迫した源平対立を目前にして場違いのようにも思えるが平家物語作者が「古今東西の歴史に通じ、それを手本にしていること」を認めて貰いたくて書き残したのであるから、飛ばさずにお読み頂きたい。

咸陽宮というのは、黄河流域の古都・西安市西北部に置かれていた「秦（しん）の始皇帝」の宮殿であり、抑圧されていた北方の小国である「燕（えん）」の太子が、始皇帝の暗殺を企むけれども失敗する…というのが平家物語に採録された話である。時代としては紀元前二百年代の事になる。それを伊豆で挙兵した源頼朝の行動に当てはめて「異国の先例に照らしても、源氏の挙兵は失敗するであろう…」と噂をして平家に追従する者もあつた、としているのが此の章段のポイントであるらしい。作者も源平両氏に気を使っている。

咸陽宮（かんようきゅう）のこと

源頼朝が伊豆に挙兵した当時は、京都から逃げた行つたような形の平家ではあるが安徳天皇を奉じているからは抵抗する者は「朝敵」に分類されてしまう。「勝てば官軍…」という諺も未だ無かつたと思われるし、頼朝は第一戦で壊滅的な打撃を受け、辛うじて平家方の梶原景時に見逃して貰い命が助かつたのであるから、その挙兵が無謀と言われ天皇に刃向かう賊にされても仕方が無い。

その様に、勝ち目の無い計画で事を起こし失敗した例を異国（中国）に求めてみると、紀元前四百年代から同二百年代に及ぶ春秋・戦国時代に七雄として大陸北部に在った「燕（えん）」の国の太子丹がいる。秦の国と戦つて始皇帝に捕らわれ、その居城・咸陽宮に監禁されて十二年が経つた。

ある日、太子丹は始皇帝に対して涙ながらに次のように訴えた。「私は故国に老母を残しております。既に老い先短く一目だけでも生前に会つて置きたいと思ひますので、どうか私に暇を下さい」

是を聞いた始皇帝は「私が仮にでもお前を釈放するなどと言うことは、馬に角（つ）が生え、鳥の頭が白くならなければ有るまい（絶対無い）——その時期まで待つが良い」と嘲笑いながら言つた。太子丹は、天を仰ぎ、地に伏して「願わくば馬に角が生え、鳥の頭が白くなつて私が故国に帰り、母の顔を見ることができますように…」と一心に祈り続けた。

其の昔、東方の浄土に住むという妙音菩薩は、インドの靈鷲山（釈迦が悟りを開いた山）に来て不孝を戒（い）ましめ、孔子と弟子の顔回は中国で忠孝の道を説かれた。冥界（あの世）と顕世（此の世）の仏・法・僧は、孝行の志を憐れみ賜うことなれば、遂に角の生えた馬が宮殿に現れ、頭の白い鳥が庭先の木に止まつた。是を見た始皇帝は驚くと共に「綸言汗の如し（りんげんあせのごとし）天子の言葉は覆せない」と言う諺に従つて太子丹を本国へ帰した。そうはしたものの、太子丹を本国へ帰せば自分に背くことを恐れた始皇帝は、何とかして丹の帰国を妨害しようとした。

秦の国から燕の国へ行く途中には楚（そ）の国があり、国境に大きな川が流れている。昔のことだが、其の川には橋が架かつていた。始皇帝は軍隊を先回りさせて、太子丹が渡る際に踏めば落ちる仕掛けを

橋の中央部に作つておいた。何も知らない太子丹は其処を通過したので予定通り河中に墜落した。川の流れば急であつたから落ちれば溺れる道理なのだが、太子丹は平然として地上を行くように向こう岸に着いてしまつた。隠れて見ていた秦軍の兵も驚いたが、太子丹も何が起きたか分からない。良く見ると無数の亀が集合して甲羅の上を歩かせていた。是も親孝行の志を神仏が憐れんだからである…原本には物語として記載されているが、亀の話は有り得ないし、太子丹は何とか苦勞して帰国した、と言うことなので有ろう。

古代中国の話は続く。当然のことだが、太子丹は恨みを抱いて始皇帝に従わなかつた。そこで始皇帝は軍隊を派遣して丹を討ち燕国を滅ぼそうとした。対抗策として燕国（太子丹）は荊訶（けいか）と言う武人を頼んで大臣とした。荊訶は、また田光先生という武人を誘つた。田光先生は「貴方は私が未だ若く盛んな人物と思つて仕事を依頼されたのでしょうか、麒麟（きりん）この場合は駿足の名馬は千里を飛べども、老いれば奴馬にも劣ると言ひます。私は老いていまして、御希望には添えませんが、然るべき勇士を誘つて味方に付けさせましよう…」と云つて帰ろうとした。其の時に荊訶は「この事は決して他の者には口外しないで下さい…」と強く申し入れた。

是を聞いた田光先生は「自分の言動を、他人に疑われることほど恥となることは無い。もし（自分が秘密を漏らさなくても）是が漏れた場合には先ず自分が疑われるであろう…」と云つて李（すもも）の木に頭を打ち当て死んでしまつた。（一説では荊訶を励ます為に自殺したとする）

また秦の国に范予期（はんよき）と言う勇士が居り、始皇帝に親兄弟や親族を滅ぼされて燕の国に逃げて

いた。始皇帝は各地に通達を出し「范予期の首を持参した者には五百斤（八千両）の褒賞金を出そう」と広告した。是を知った荊訶が范予期の許に行き「聞く所に依ると貴公の首に五百斤の賞金が掛かった。私に首を貸してくれるならば是を始皇帝に見せ、相手が喜んで居る隙に私が始皇帝を暗殺することは容易で有ろう」と申し入れた。范予期は興奮して躍り上がり、やがて大きな息を継いでから「私は親・兄弟・親族まで始皇帝に滅ぼされておられ、夜も昼も是を思うときに恨みの心が骨の髄まで沁み通って耐え難い思いで過ごしている。もし始皇帝を滅ぼしてくれるならば（その人に）自分の首を差し上げることなどたやすくいことである」と自分で首を斬った。

それとは別に、秦の国の秦巫陽（しんぶよう）は十三歳の時に仇打ちをして燕の国へ逃れていたが勇士として知られ、彼が怒りを表すと大方の者は恐れて、笑えば幼児もなつくと言われていた。秦の国に入った荊訶は、其の秦巫陽を案内者として都に行く途中で或る村に宿をとったところ近くの里に樂器を演奏する者が居ると言うので、その音楽の調子を聞かせて占いをさせた。すると「敵である始皇帝の運氣は水で、我が方は火」という結果が出た。火は水に勝てない。そのうちに夜が明けてしまった。折から白い虹が天に現れ、それが太陽に掛かりながら途中で消えている。秦巫陽は「私たちの目的（始皇帝を倒すこと）が達せられることは無いでしょう」と言った。それでも何もせずに引き返せないで、始皇帝の居る咸陽宮に行き「燕国の使者ですが、国の見取図と范予期の首を持ってきました」と申し入れると、それを家臣に渡せ！という。「大事な物であるから）どうしても直にしか渡せません！」と拒否したので、秦国側も使者を迎える儀式の準備をして、燕国の使

者こと荊訶を迎え入れた。

咸陽宮は都市の周りが一万八千三百八十里あると言われていた。当時の一里は二七〇メートル程であろうけれども、それでも相当な規模になる。

皇帝の居る内裏は平地より八百メートルほど高い台地に立派な城門や殿舎が立ち並び其処は金銀・真珠・玉石などで飾り尽くされている。宮殿の四方は高い鉄の塀で囲まれ、やたらと鉄の網が張り巡らされているのは、敵の多い始皇帝を暗殺者から護る対策であろう。その為秋に田に降り立つ雁が春に北方に帰る際に飛行の妨げになることから城壁に設けられた門が雁門（がんもん）と名付けられていた。荊訶らは、其の門を開けて城中に通された。阿房殿と言う始皇帝が政治を行う殿舎が在り高さ三十六丈（約六十メートル）、東西に約百メートル、南北に約八十メートル、床下の高さは約十五メートルの旗を立てても空間があった。

宮殿の屋根は青い寶石ラピスラズリの瓦で葺き床は金銀を豊富に使って光り輝いている。（豪壮な宮殿であった）その場所で荊訶は燕国の地図を持ち秦巫陽は范予期の首を持って宝石で飾られた階段を昇り、始皇帝に近づこうとしていた。ところが、宮殿内の規模が余りにも壮大な為（き）に気がおくれした秦巫陽が震え出した。是を見た始皇帝の家臣たちが「秦巫陽は何かやましい心（企み）があるから震えているのである。怪しい人物を主君に近寄らせてはならない」とする諺が有る」と言って警戒し出した。荊訶は秦巫陽の傍に戻り「此の者に謀反の心など有りません。ご覧の様に田舎者ですから、立派すぎる此の御殿を見て呆然としているのです」と尤もらしい釈明をしたので、始皇帝の家臣たちも、納得して静かになった。

荊訶たちは、始皇帝に近づくことが出来て燕国の地図と范予期の首とを差し出したのであるが、地図を入れた箱の底に隠していた剣が氷の様に光るのを見て始皇帝が逃げようとした。荊訶は皇帝の着衣の袖を掴（つか）んで剣を押し当てたので、さすがの始皇帝も是が最後と思われた。

回りに居た数万の秦兵（数が多すぎると思うのだが中国の話であるから放って置いて）が何とか助けようとしたけれども手が出せない。さすがの秦の始皇帝も反逆者に殺害されることを悲しむしか無いのだが、其の時に始皇帝が「私に少しの猶予を与えよ。最愛の後（き）さきが奏でる琴の音を聞いてから死にたい」と注文を出した。是を荊訶が許したのだが其れに依り此の話が嘘であることが分かる。固い言葉で言えば難難辛苦の末に千載一遇の好機で捕らえた強敵の注文を四面楚歌の状況で聞いていて目的が果たせる道理がない。

騙されて原文に従うと、始皇帝は三千人の愛人を持っていた。その中で花陽夫人と言う琴の名手が居て、此の女性が奏でる琴の音を聞けば怒り狂った勇者も心を和らげ、飛んでいた鳥も墜落し、草や木も感動して揺れ動いた（風が吹いてきたのであろうか）とされる。その名手が国王の危難を避けしめる為泣く泣く琴を弾いたのであるから、泣き声も伴奏に入って素晴らしい演奏になった。

最初は仕方なく聞いていた荊訶も名演奏に引き込まれて次第に頭を下げ、耳をそばだてるようになってしまった。当然の事だが油断が生じる。是を見た花陽夫人はアンコールの押し売りで更に一曲を追加した。その曲は即興で「絹でも薄ければ強く引くと切れる」と歌った。始皇帝は脱出の方法を考え、周りに置かれた七尺（二メートルほど）の屏風は何とか

越えられると判断し、荊訶を抑えられている着衣の袖は引きちぎって逃げることにした。琴など聞いたことが無い荊訶は脱走の

打ち合わせに気付かない。荊訶の手が緩んだ隙に始皇帝は袖を引きちぎり屏風を飛び越え、太い銅柱の陰に逃れた。荊訶は怒って剣を投げ付けたけれども、近くに居た医師が持っていた薬袋を剣に投げたので、剣は銅柱を深く傷つけただけであった。他の武器を持つて居なかった荊訶は追撃が出来ず、王の軍隊に捕縛されてしまった。始皇帝はその場に自分の剣を届けさせて荊訶を八つ裂きにしたと言う。同行していた秦巫陽も討たれた。

始皇帝は直ちに軍隊を派遣して燕国に攻め入り、太子丹を討ち滅ぼした。天が燕丹の企みを許さなかったということであり、此の事から考えれば平家打倒を企んだ源頼朝の行動も成功しないであろうと平家に追従する人々も居たのである。然し、誰が何を言おうと頼朝は生き返ってしまった。

文学荒行（もんがくあらぎょう）のこと

時代の流れに沿って出番が多くなった源頼朝は去る平治元年（一一五九）十二月、十四歳の時に父親の左馬頭（さまのかみ）馬寮の長官、従五位の上、義朝が謀反を起こしたことに連座して（平治の乱に敗れて）翌年の永暦元年三月二〇日付で伊豆国蛭島（ひるがしま）島では無いが、蛭が多い土地であつたらしい）へ流され二十余年の歳月を送っていた。余計なことだが付け加えて置くと頼朝は合戦に敗れて父親たちと都落ちをする途中に馬上で居眠りをしてはぐれ、平家の武将で平頼盛に仕える彌平兵衛宗清に捕らえられた。平清盛は

死罪を命じたのだが継母（頼盛の生母・藤原氏）が憐れんで懇願し「無期懲役」に減刑されて伊豆刑務所に服役中であつた。在地武士の伊東氏と北条氏が監視をしていたのである。

原本には「二十年経つて、分別のつく年頃になつたのに、どういう気持ちで平家に対する謀反など起こすようになったのか：高尾の文覚上人に唆（そ）そのかされたのであろうか：」と書いてあるが分別のつく年頃になつたからこそ、何時までも刑務所暮らしも出来ない：と思つたのである。

平家側から言えば、源頼朝に余計な知恵をつけた文覚と言う人物は、元は渡邊党の遠藤左近将監盛遠の子で遠藤武者盛遠と言つた。宮中勤務で上西門院に付けられていた。上西門院は鳥羽天皇の第二皇女で本名？を統子と言ひ、後白河法皇の姉になるのだが母代わりとして「准母」という地位を与えられていた女性である。文覚上人こと盛遠少年は、武士の子に生まれながら女性の警護役をさせられていたのを不満に思つたのかどうか十九歳の時に退職して僧侶になろうと決意した。

諸国修業に出る前に「修行はどれほど大変なのかを試そう」として六月の風の無い猛暑の日に藪（やぶ）の中へ入り込んで仰向けに寝転がった。

虻（あぶ）、蚊、蜂、蟻などの毒虫が不法侵入者を撃退しようとして取りついてきたから喰ひ放題、刺し放題にやられたけれども、振り払うことも無く、自分は七日間を飲まず食わずで我慢をして八日目によく起き上つた。評判を聞いて集まつた人に「修行というのはこの程度の難しさなのか？」と質問をした。聞かれた人が呆れて「其処までしたなら命が幾つ有つても足りない：」と言へば、「是程のことは容易い（たやすい）ことである」と言つて諸国修業の旅

に出た。

各地を回つてから熊野に行き那智山で「行」の初めに瀧に打たれようと瀧水の落ちる場所まで降りて行つた。季節は既に十二月も十日を過ぎて寒さが増し、辺りには雪が積もり氷が張り詰めて谷の流れは音もせず、峰の嵐も吹き凍り、瀧水もつららに変つて一面の真つ白な光景に変つていた。文覚は辛うじて滝壺に降りて、首まで氷水に漬かり救いの経文を一心に唱えた。

次いで文覚は「瀧水に二、三日浸かり、四、五日目に我慢出来ず浮き上がったところを数千丈（二万メートル弱）の大滝の激流にのまれ刃の様に尖つた岩角にぶつかりながら五、六町（五、六百メートル）流された：」と原文に書いてあるが子供でも分かる大嘘である。寒さの中で有る程度の修行をしたことは認め話を続ける。

寒さで朦朧（もうろう）となつた文覚の前に一人の童子が現れて文覚の手を取り氷水から引き上げてくれた。（不動明王に仕える八人の童子の一人とする）多分、噂を聞いて何人かの人たちが集まつていたと思われるが、火を焚いて暖めてくれた。

寿命は尽きず、生き返つた文覚は自分が助けられたことを知ると感謝するどころか、凄（しみ）い剣幕で怒りだし「此の瀧に二十一日間、打たれ、不動の呪（のろ）三十万辺を唱えようと大願をかけた。今日で未だ五日しか経つていない。七日も過ぎ無いのに（修行を妨げ）誰が此処へ連れて来たのか！」と怒り出した。その様子を見た者は恐怖心で物も言えなかつた。文覚は怒りながら滝壺に戻つていった。

それから二日目に今度は八人の童子が来て文覚を滝から引き上げようとしたのだが文覚は激しく抵抗して上がらず、三日目に遂に心臓麻痺か何かで死ん

でしまった。那智山のほうでも神聖な滝壺を汚されては困るので、天から応援に来た二人？の童子が協力して文覚の身体を頭から足先まで更には指の先まで、暖かく香ばしい手でマッサージを施してくれた。そのお蔭で再び蘇生した文覚は今度は夢を見ているように「そもそも、この様に手厚く介抱して下さるのは如何なる方々ですか」と質問をした。(世話の焼ける坊主だが…)

それに対して、二人の童子は「我々は不動明王様にお仕えする八大童子のうち、矜羯羅(こんがら)と制託迦(せいたか)と言う二童子である。文覚が大きな願望を起こして勇ましくも荒々しい修行を企てているらしいから、行って協力してあげなさい、と明王様が仰せられたので此処に来たのである」と答えた。

普通の者なら、其れだけで有難がるのだが一筋縄ではないかな文覚は、不遜にも声を荒らげ「して、不動明王は何処にお居でになるのか？」と質問をした。二人の童子は「…都卒天(とそつてん)仏教上の空想の世界である須弥山の頂上にある浄土」と答えて垂直離着陸機のように空中へ舞い上がり姿を消した。さすがの文覚も是には驚いて天に向かって合掌をした。それから、自分の行いが不動明王にまで知られたことに満足して、性懲りもなく再び滝壺に戻って行った。それからは有難くも目出度く、吹く風も身に沁みることなく、落ちて来る瀧の水も湯のように温かく感じて、二十一日間の荒行を無事に成し遂げることが出来た。大願を成就した文覚は、それから那智に千日籠り、吉野の大峯山に三度、葛城山に二度入り、更に高野山、粉河寺、吉野の金峰山、加賀の白山、立山、富士山から伊豆・箱根、信濃戸隠、出羽羽黒など観光ガイド顔負けで日本国中を回っていた。其

「ことば座団員」&「朗読教室生徒」募集!!

劇団員の募集

ことば座は、霞ヶ浦を中心とした「ふる里物語」を朗読手話舞と朗読劇に表現する劇団です。ことば座では、スタッフ部門・俳優部門の団員を募集しています。ふる里劇団に興味をお持ちの方の連絡をお待ちしています。

朗読教室生の募集

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることを言います。朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。 月1回コース(受講料:¥6000円) 2回コース(受講料:¥9000円)

連絡先 080-3125-1307(白井)

<http://www.furusato-kaze.com/>

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

の中に故郷が恋しくなつて都に戻つて来たので、飛ぶ鳥を折り落とす程の刀の刃のような切れ味の修験者と噂をされていた…と原本にあるが、故郷を恋しがるようでは修行が足りないのではないかと未熟者は考えてしまう。(つづく)

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会も11年目に入りました。

当会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659